

博<sup>は</sup>多<sup>た</sup>小<sup>こ</sup>女<sup>む</sup>郎<sup>ら</sup>波<sup>な</sup>枕<sup>まくら</sup>

解題

享保三年十一月二十日から初めて大阪の竹本座に上演された。作者は近松門左衛門(時に六十六歳)である。本曲は三卷に分れてゐる。小町屋惣七・博多小女郎の情話を流麗な筆によつて脚色し、之に密貿易仲間の生活を織込んだもので、實に巢林子の世話物中に異彩を放つてゐる名作である。

實説

本曲は、長崎表密貿易の仲間が、享保三年閏十月十九日に、大阪で處刑された實説を脚色したものである。

「月堂見聞集」卷之十、享保三年の條に、

「閏十月十九日朝六つ半時に、大坂御屋敷にて今度長崎表拔買の者に被爲仰付候趣、北條安房守様御屋敷にて、拔買の科人御召出し、其町々年寄五人組家主共被爲召出、安房守様飛騨守様御立會にて被爲仰渡候、扱又殿様御入被遊候て後、御役人方より本人町人共へ御申渡し有之由

罪人惣高六十四人、内御預け三十人許

京東石垣二條行當り田中屋半兵衛事

辰砂源兵衛

同油小路通二條上る町

福島屋仁左衛門

右兩人は閏十月十九日朝、牢屋敷にて死罪に被仰付候

長崎者 さつまや嘉平次

肥前者 石垣八右衛門

肥前者 米屋平兵衛

大坂者 小倉屋善右衛門

右七人閏十月廿一日より三日の内、高麗橋にて鼻をそぎさらし、夫より御追放

大坂者	難波屋仁左衛門
小倉者	若松屋市兵衛
小倉者	岩崎三介

野村久左衛門

清左衛門

勘左衛門

右三人の者方々へ住居仕候抜買頭にて候へ共、其同類訴人いたし、御公儀様より御穿議の多そくに相成申候故、御褒美として家財の内四ヶ一被召上、残り本人へ被下候而御赦免、何方に住居仕候共御構無之候

傾城

かつ山 年三十一歳計

右は野村久左衛門、小西又兵衛兩人かけ持の女房に被成居申候、尤拔荷少々、自分に賣買仕候、これも御構無之御赦免

京大宮通七條よしと名を替

同

江口 年二十歳計

右は大坂者久左衛門と申者妻にて御座候、男走り行方知れ不申候、是も御構ひなく御赦免

油小路二條上る町まつと名を替同

名は不知

右は油小路二條上る町福島屋仁左衛門妻、諸色道具被下御赦免

三條通橋東

きく 年四十歳計

是も御構無之御赦免

と記載してある。

博多小女郎波枕

これ等の人名の中で、本曲中の人名と似てゐる者を比較すれば、

肥前者、石垣八右衛門 長崎者、毛剃九右衛門 大阪者、小倉屋善右衛門 上方者、小倉屋傳右衛門

岡本清左衛門(愼市事) 京住居、小町屋惣七 大阪者、難波屋仁左衛門 上方者、難波屋仁左

小倉者、若松屋市兵衛 市 五 郎 肥前者、米屋平兵衛 阿波徳島者、平左衛門

小倉者、岩崎三介 三 藏 遊女、江 口 一文字屋遊女、江 口

長崎者、薩摩屋嘉平次 長崎者、彌平次 遊女、か つ 山 丸屋遊女、勝 山

又本曲の終の文に、「汝等は流れの身、彼奴等に添ふば勤の習ひ科にあらず、行先とても構なし」と書き、「鼻刺ぐ血みどろちんがい追拂ふ」と書いてあるのも、事實に據つたものである。

博多小女郎に就いては、西鶴の「一代男」巻五、當流の男を見しらぬの條に、「筑前の柳町を見にまかりぬ、昔は博多小女郎と申してかぶき者ありける、人の命を取つて袖の湊の大騒より云々」とある。蓋し何か名高かつた實説があつたのであらう。

影 響

本曲が大阪の竹本座に上演された時、宮古路國太夫が初めて出座した。「聲曲類纂」に、「宮古路國太夫……享保三年十一月大坂竹本座に於て始て芝居を勤む。此時博多小女郎浪枕といふを語れり。夫よりこのかた國太夫節とて諸國に聞ゆ。享保の末江戸へ下り、宮古路豊後嫁と改め、葺屋町河岸播磨といへる小芝居を勤む。同十九寅年堺町中村座に於て譽れをなし、それより世人宮古路節又豊後節と稱して世に行はる」とある。後世の常磐津・富本・清元の流派の源である。

本曲を改作したものに「博多織戀鏡」(寛政元年五月九日から大阪北堀江座に上演した。作者は菅尊助・中村魚眼である。その)がある。

歌舞伎では、「和訓水滸傳」(安永五年七月九日から大阪小川吉太郎の芝居(角座)に上演された。初代淺尾爲十郎が)、「けいせい博多織」

(安永七年正月上演。この時も淺尾爲十郎が以前の如く扮した)、「千代始音頭瀬戸」(天明五年七月江戸桐座に上演。毛剃九右衛門を海賊玄海の灘右衛門と改め、初代中村代記に、「海賊玄海の灘右衛門・仲藏……この狂言仲藏海賊けぞり九右衛門のかた)、「三幅對書始會我」(天保五年正月江戸市村座に上演。にて奢の遊の所、詰に價勅使の所、捕手大勢雀踊の形にてたて有、大評判)とある)。「三幅對書始會我」(これは原作に近づいてゐる。毛剃

代記に、「海賊玄海の灘右衛門・仲藏……この狂言仲藏海賊けぞり九右衛門のかた)、「三幅對書始會我」(天保五年正月江戸市村座に上演。にて奢の遊の所、詰に價勅使の所、捕手大勢雀踊の形にてたて有、大評判)とある)。「三幅對書始會我」(これは原作に近づいてゐる。毛剃

に扮した七代目市川團十郎が、長崎方言を用ひ、彼が長崎旅行土産の舶來品を舞臺に陳列して、見物人を喜ばせた。近頃は、巢林子の原作に本づいた「毛刺九右衛門」等がある。小松屋宗七浪枕博多諷し文字ケ關元船の場が、往々上演されてゐる。

上之卷 (門司の沖) (奥田屋内)

登場人物の主な者

- 小町屋 惣七 (京商人。若者)
- 小倉屋 傳右衛門 (上方者。毛)
- 市五郎 (毛刺の配下)
- 小女 郎 (博多柳町奥田屋の遊女。惣七の愛人)
- 江口 (一文字屋の遊女)
- 操 (酒屋の遊女)
- 町夜の番
- 榎
- 毛刺 九右衛門 (長崎生れ。密)
- 難波 屋仁左 (上方者。毛)
- 三藏 (毛刺の配下)
- 重の丞 (奥田屋の禿)
- 四郎 左衛門 (奥田屋の亭主)
- 山 (丸屋の遊女)
- 倉 (和泉屋の遊女)
- 彌平次 (長崎者。毛)
- 平左衛門 (阿波徳島者)
- 惣七の下人
- 重の丞の朋輩 (奥田屋の禿)
- 奥田屋の下女下男 數多
- 薄雲 (丸屋の遊女)
- 大磯 (車屋の遊女)

秋の夕暮、西國の大湊門司の沖に、檣垣作の大船が碇泊してゐる。京の商人小町屋惣七は、商用の爲筑前へ下る途中、其の大船が密貿易船であるとは知らずに乗合せた。船長毛刺九右衛門は部下の者と共に檣(甲)に出て、氣遣はしげに海上に目を配り、

博多小女郎波枕

密貿易に遣はした市五郎・三藏の歸りを待つてゐる。其の間に惣七を部下の者らに紹介した。そして彼が二十七歳の時、長崎諏訪神社祭禮の日に、薩摩者と喧嘩した事などを語り、惣七にも何か戀物語でも話せといふ。惣七乃ち愛人小女郎(博多柳町奥(田屋の遊女)を請出さうとする由を語る。これを聞いた九右衛門等は惣七を揶揄したので、惣七は忿懣し、頭痛がするとして座を立つて船底に下りる。

折節小倉口から艇が波を押し切つて来る。九右衛門聲を掛け、「ヤア三藏・市五郎、首尾はく」と問ふ。三藏・市五郎「運好く荷物受取り金渡し、彼方も上機嫌此方も仕合」と答へる。九右衛門喜び、「船頭起きよ、舟子も来い。荷物請取れ」と呼ばはる。部下等「よしきた」と勇み立ち、艇に積める虎の皮・朝鮮人參・緞子・移麝香・紗・縞縞・六絲緞の縷子・漆・鼈甲・珊瑚珠を親船に運ぶ。市五郎・三藏「この一通は來夏の船の割符。迎船にお出でなされとの言傳であつた」とて、九右衛門に其の割符を渡す。

かくて皆喜んで親船に乗移る。惣七は欄板に憑つて窃に其の有様を覗つて居た。これを瞥見した九右衛門は、彼によつて秘密の漏洩するを恐れ、部下を集めて、「彼を海に葬れ」と命じた。鬼とも組むべき荒子共は揆鉢巻に纏掛け、尻引賽けて惣七の下人に飛附き、海に投込めば、闇の夜の四邊は見えず、ざんぶと水音立てて波に吞まれてしまつた。次に惣七を捕へて揆伏せ、これも船の外に投飛ばした。然るに惣七は運強く、傳馬船の中に落ちて氣絶したが、忽ち正氣附き、窃に纜を解いて櫓を押立てた。そして大船から少し隔つてから聲を掛け、「オ、皆々骨折々々。惣七ここから禮を申す。この返報はおつて致す覺えて居れ」とて、命限り根限り櫓腕の續く限り、漕ぎ行く跡の白波と消えた。

博多柳町の奥田屋では、禿重の丞が、朋輩の禿と唐人踊の稽古をなし、三味線彈きの座頭欲市と喧嘩して、共に亭主四郎左衛門に叱られる。折から小町屋惣七は萬死に一生を得て博多に漕ぎ著き、深編笠を被り見窄らしい姿で、奥田屋を訪ひ来て内を覗ふ。重の丞は之を見て乞食と思ひ、施しの一錢を與へようとしたが、其の乞食が絹布を纏つてゐるのを訝り、顔を差覗いて、「ヤア京の惣七様ぢや。太夫様、惣七様が乞食になつてござつた」と呼ばはる。惣七は身を恥ぢて逃げようとしたが、重の丞は繩附いて放さない。

この時、小女郎は奥の間で心靜かに亡母の十三回忌を營んでるが、この聲を聞いて、家内の者と共に表に走り出る。そして惣七の深編笠をかなぐり捨て、「嬉しや能う来て下んした。其のお姿はどうぞいの」と、涙ぐみながら、「四郎左様、惣七様を奥へ連れまして下され。話したうござんす」といふ。四郎左「御尤々々、お馴染の惣七様、御用あらば御遠慮は入りませぬ」として、打連れて奥に入り、惣七は小女郎と只二人對坐する。そして小女郎の情深い言葉に慰められて眼をしぼだたきながら、「一年振に息災なお前の顔を見て嬉しい。よい事を聞かさばこそ、この淺ましい形になつた譯を聞いてくれ」とて、海賊船に乘合はせ、命からがら遁れた仔細を打明ける。小女郎も涙に袂をしほりながら、「能う生きてゐて下んした。貴方の身は私がどうな致しまする。さぞ肌が寒からう。お顔も細りさんした」とて、我が上著の中に惣七を引寄せて抱締める。背後には佛壇の香煙がたなびいて、いとど物の哀れを添へる。

表には「大盡様御來臨」と、叫ぶ下男の聲が聞えて、ざわめき立つ。小女郎「ヤレ客が来る。見られともない、退きましょ」と、惣七の手を取つて奥に入る。やがて毛剃九右衛門眞先に立ち、彌平次・傳右・仁左・平左・市五郎・三藏が後に續き、いづれも金に飽かした衣裝を著飾り、威勢よく入り來つて座敷に居並ぶ。女中も下男も皆出でてこれを取持つ。九右衛門は亭主を呼び、「道すがら見て來た一文字屋の江口・丸屋の勝山・同じ家の薄雲・油屋の操・和泉屋の小倉・車屋の大磯を今日中に請出して、これに居られる人々に添はせ申せ」といふ。亭主畏つて硯引寄せ、其の由を認めて使に持たせ、急いでそれ等の遊女を呼びに遣る。其の間に酒宴の膳も出る。九右衛門は朝鮮人參・珊瑚珠・緞子・緋縮緬に綿の代まで添へて亭主に與へる。四郎左は高價な數々の品を貰つて肝を潰し、「何時の間にこのやうな大金持になられましたか」と問ふ。九右衛門乃ち得意げに懷帳を取出し、長者經と稱して讀上げる。其の詞に佐夜の中山無間の鐘の由來を述べ、世帯持はよろづ始末に氣を附けねばならぬと例を擧げて示し、諸謔を極める。

小女郎は、隣室で客が面白けに騒ぐを聞いて歎息し、「ア、金もある所にはあるものよ。五六人の太夫達を請出さう、何遣らう

彼遣らう此遣らうと、金銀財寶を塵埃のやうに遣ひ捨てる。私や父様母様の貧乏な生活を見た時も、能はぬ金が欲しいとは夢にも思はなんだが、今日になつて人の身請が羨ましい、金が欲しうなりました。あの豪贅な客はどういふ仕合な男か顔が見たい」とて、障子の隙から差覗き、「ありや私が知る人、まさかの時は心便りになりましたよと言うてくれた人。金借りて来ましょ」とて立つ。惣七「いや待て。お前の口から無心をいふのは身の恥だと思はぬか」。小女郎「恥かしいも事によります。今も話した通り、來月は筑後の衆が私を請出すとて、出口の佐渡屋と薄約束をしました。首を長うして貴方の下り待つたれどこの始末。私や人手に渡されては生きてはるませぬぞえ。金を借りたとて返せば恥にもならぬ事。私が心に任せて下さんせ」とて、振切つて行く小女郎も、遣る惣七も、共に涙が眼に溢れてゐる。

座敷にゆるぎ出た小女郎は、さすが太夫の威勢備はつて、芙蓉の顔容しとやかに、衣のゆかしい薫かばつと匂うて人の魂を奪ふ。荒男等は俄に襟を正す。宛然鬼が花見る風情である。小女郎ほほ笑み、「毛刺様久し振でござんす。私や貴方へ無心に來た。急に身請して貰はねばならぬ事が出來たが、肝心な物が無い。かねく御親切な言葉にあまえ、此方に金の工面がつくまで、私が身請のなる程貸して下され、お頼み申します」。毛刺「ハテ日本一の粹様、言ひにくい事を能う言はしやつた。お前の事なら千兩でも萬兩でもお貸し申す。コリヤ亭主、小女郎も一處に身請する。金は毛刺が引受けた。これ小女郎様、呼びにやつた女郎が來るまで爰に居て下され」。小女郎「まあ待たしやんせ。貴方に禮を申させねばならぬ私の思ひ人がある」とて、立つて隣室に行く。

其の間に招き寄せた遊女等が座敷に出る。毛刺は亭主に命じて、これ等の遊女を暫く次の間に控へさせる。やがて小女郎に連れられて出た惣七は、毛刺を見て驚く。毛刺もはつと仰天し、互に血相を變へて身構へする。惣七「此奴等は下の關の」といひかけた。毛刺の部下等は、其の後を言はずまいとして、「口叩かすな打殺せ」と殺氣立ち、一擧に斃さうとした。毛刺は之を制止して部下等を斥け、「これ若い人惣七殿、貴方は誠に危い命を拾はつしやつた運の強いお人ぢや。運を力に商賣する九右衛門が、片



腕となる人と見込んでこれ手を下ける。仲間に入つて下され。さすれば貴方を慕ふ小女郎も貴方に添はせ、不自由な生活はさせ申さぬ。否と言はしやりや事になる」と、さすがは首領たる襟度を見せて、言葉は優しいが、否と言へば切掛らうとする氣色が面に現れてゐる。惣七も手詰の返事、否と言へば小女郎を人手に渡す上に命までも取られる。どつちに答へても長からぬ命と観念し、國法をや慎むべき、小女郎にや添ふべきと、運命の岐路に立つて煩悶にくれる。何事も知らぬ小女郎は、ひたすら愛人の身を氣遣つて仲間入りを勧め、愛人の懐に手を差入れて、「この汗わいの」と、鼻紙のありたけ拭き捨てる。濡れて破れる人の身の、たしなみ難い道に惑へる惣七は、真心縮めた小女郎の心に動かされて意を決し、九右衛門の配下となる事を誓つた。ここに於て九右衛門は部下の者や遊女等を呼寄せ、亭主を呼んで、小女郎共七人の遊女の身請金千五百兩を支拂つた。かくて一同は陽氣に満ち、酒酌み交はし放歌亂舞して賑はふ。

折節、町の夜番が慌しく、「捕手が來た」と知らせて來た。毛剃等ぎつくり胸にこたへ、顔色蒼ざめて狼狽し、「コリヤ堪らぬ。船へ歸る脇道はないか」と顛へあがる。亭主四郎左は様子を聞いて歸り、「科人は既に捕へられました。此方の事ではござらぬ」と知らせたので、海賊等はほつと一安心する。九右衛門「長居は無益。惣七殿京へ上る。サア皆々去なう」。女郎衆は驚縮で船までござれ」とて、各口々に別れの挨拶をかはし、心の不安を諧謔に紛らして出で行く。

評

月澄みわたる秋の夜、門司の沖で一攫千金の密貿易をする海賊等の、不安な心持や冒險的な活動が、あり／＼と目前に浮ぶ如く巧に描寫されてゐる。小町屋惣七は偶然この密貿易船に乗合はせた。彼は將來愛人小女郎と共に平和に暮されるべきであつたのが、これが爲に一生奇しき運命に操られねばならぬ、其の第一歩に入つたのである。

場面は忽ち轉じて奥田屋と變り、紅燈綠酒の歡樂の裡に、嗚咽する相愛の若い男美しい女の、悲しくも優しい眞情を寫す。やがて其の兩人が歡樂の座に出るや、俄然殺氣張り、兩人の心は盲目愛と威嚇とに惑はされ、遂に膝を屈して海賊の群に投じらる事

となる。

この巻は、背景の美に異國情調を配して、變化波瀾に富んだ場面を活寫し、情味溢れた名文と相俟つて異彩を放つてゐる。

○波枕 波を枕に寝る義。船中の旅泊。西鶴作

「日本永代鑑」卷二、天狗は家名の風車の條に「舟に取乗り舟も脱がず波枕して、いつこなく寐入りけるに。

○船を出しやらば 氣に懸る。『若みどり』(寶永三年序)卷四、夜ふか船の唄に「船を出し

やらば夜ふかに出しやれ、帆影見ゆればなつかしや。この唄を少し改めて、密貿易船の不安な心持をきかせた。

○歌に詠むてふ文字が關 文字が關は古歌に歌まれた歌の名所であるからかくいふ。「新勸撰

集」卷十九、雜歌四の部、入道前太政大臣の歌にも、「春秋の雲居の雁もこまならず、たが玉章の文字の

關守。文字は門司にも書く。「國花萬葉記」卷十三、長門兩の條に、門司關り赤間と門司昔は、長門路に

つづきてつなり、門司今は關前の内になれり」とある。

○小判走れば銀が飛ぶ 魯妻の「鐵神論」に「無氣而飛、無足而走」。以て金銀の出入多く、好景氣なるをいふ。

○楡垣作 兩舷に楡垣を組立てた大船をいふ。「和漢船用集」卷四に「楡垣」攝州大坂廻船問屋の仲間船を云、六七石以上皆大船也、垣立の筋を楡垣にする故の名なり、云々。

○端 反また段とも書き、帆の幅を數へる語で、筵一枚の幅即ち三尺をいふ。「十四五端」は、木綿帆

### 博多小女郎波枕

歌を出しやらば、夜深に出しやれ、帆影見るさへ氣に懸る、長門の秋の、夕暮

は歌に詠むてふ文字が關、下の關とも名に高き西國一の大港、北に朝鮮釜山海、

西に長崎・薩摩・唐・阿蘭陀の代物を、朝な夕なに引受けて千艘出れば入船も、日

に千貫目萬貫目、小判走れば銀が飛ぶ、金色世界も斯くやらん、沖に何待つ楡垣

作十四五端の廻船に、船頭舟子は褌袍著て足踏伸はず梶枕、四五人の乗衆ども櫓

の上につづくつく、そよと波音船影に、心を付る蚤取眼物案じ顔も頼すいたる、

中に頭の毛剃九右衛門、生れは長崎國訛り、コリヤうんたち、また市五郎・三藏が

舟は見へいろ、心元なかばい、心たまぎりや夜敏く成て、身だまんじりともせな

い、首尾好からふば筑前さなへ此船廻し、柳町のしやうくいていども請出いて、

い、首尾好からふば筑前さなへ此船廻し、柳町のしやうくいていども請出いて、

の幅が三尺の十四五倍なるをいふ。「和漢三才圖會」に「凡木綿三幅爲一端」とある。

○廻船「和漢三才圖會」に北國東國往來稱之廻船三百艘以上至三千五百艘。

○つづくつづくつづく(熱心)に促音の添った語。

○頬すいたる 頬肉の稍落ち瘦せたを。「すく」は、へる意。ここの文は心配して瘦せた意。

○毛剃「削り」の義、科によつて氏を削られた者をいふ。それを氏のやうに用ひたのである。

○うんたち おぬしたち(御主達の詔略。うぬたち。おまへたち。

○見えいろ 見えぬやらの意。「いろ」はやらの意。現今も長崎熊本地方で用ひられ、「さうしたやらかわからぬ」の意にさうしたいろ知らんなどいふ。

○なかがばい 無いわい。「はい」は思ひきめた意をいふ長崎國語。九右衛門が心配して言ふ強い語勢が味ははれる。

○たまざりや「たまぎえ(魂消)れは」の詔。烈しい恐怖に襲はれて心魂消入れは。ここの文は、恐怖に襲はれ神經過敏になつてゐるは、夜眠るにも少しの物音に目覚めるの意。蓋し密貿易の盛衰を恐れるからである。

○身だまんじりともせない 身ごもは瞬きもしないで凝視するの意。「身む」は「身ごもは」の意にいふ長崎國語。「まんじり」は、まじく〜同同意。

○さな「さま(方)の詔。そおも(其面)の義。現

上方さなへ突走る、表の間借り切た上唐人、船頭が馴染筑前迄乗せなけりやならぬといふ仕果せにや筑前へは行かぬ船門出好かく、好か便聞かふばい、表の乗衆呼ふでわたい咄どもして紛らさん、「あつ」と答へて平左衛門呼に下るれば其跡は、鬼とも組むべき男どもあんべら取て敷かすやら、茶出しに唐茶摘み込、注ぎ出す色は薄けれど頭と敬ひし、禮儀ぞ仲間の花香成、表の乗衆小町屋忽七生得慇懃都育ち、呼れて櫓に割膝し、船頭馴染に押附ての便船、御尋ねなくとも御挨拶申答、不禮御免」と手をつけばニア、堅い、同船致し一つ釜の食事

今長崎地方では「さな」とは殆んど言はないで、「さん」又は「さへ」といひ、熊本地方でも用ひられてゐる。

○柳町 博多の遊女町として其の名が高かつたが、今は九州帝國大學が建設された爲に今の柳町に移轉した。

○しやうくゝてい 「小女郎體」の義である。「極性野群談」卷之二、月影は世世顔の丸山の條に「小女郎」を言ひて「しやうくゝ」と傍訓してある。博多方言に娘(小女郎即ち小嬢を「しやうくゝ」というたのであらう。後に釋じて「しやんしやん」といふ。ここの文は博多御町の妓女をいうたのである。

○上唐人 上方者を謂つていふ。「上は上方の意。「唐人は「倭言葉」に、「俗に唐人といふは凡て異國人を云、支那人のみにあらず○又器の詞にもいへり」とある。

○わたい「あたへよ(奥)の約説。くれられよ。下さい。こ

の現今も長崎地方の漁夫などは往々用ひてゐる。

○あんべら 南洋地方に産する貝多羅(はいたら)「テンペラ屬の多年生草本」の葉を堅に細く裂いて編んだ席。ここの文は、鬼ごも組むべき部下ごもがアンペラを取つて敷き、頭の九右衛門を其の敷物の上に坐らせたのである。

○茶出し 急須。

○花香 煮花のかをりに、主従のかんほしい情誼の意をいひかく。

○割膝 兩膝の間を割つて平坐すること。以て深く敬意を表する坐り方である。

○御手上げられ 座に手をついてそんなと悪  
態になさらないで、お手を膝に上げて樂にしまさい  
との意。前文「不禮御免と手をつけぬに願ひる。」

○そつと 「さ(坐)こ」が轉じ「そと」になり、更  
に促音つしの添はつた語。「そつと致いたゞは、少  
しばかり致しましたの意。少しばかりな。

○髪月代致さるる 額から頂にかけて髪を廣  
く削り、髪髪を以て髻を結うてゐる。

○船中の事缺き 船中は何事も足らはず不目  
由なれば。

○心置かずと 遠慮しないで。

○平懐 憚らないで平氣なこと。「倭湖菜に」「三  
代實錄に尋常平懐之時、人天眼目に平懐常實と見え  
たり、故意なき意にいふも通へり。」

○心解けたる 奥底もなく 心打解けて  
奥底に何の隠藏なき意に、「解け」「朝番」「匿く」の  
縁語を以て飾つた。

○ばん 「だ」「や」といふ程の意にいふ。即ち  
「なかはんは」無いのたの意である。この語現今も  
佐賀長崎地方で用ひてゐる。蓋し「はな」の轉訛であ  
らう。前文「なかはんは」強ひ語勢を用ひたに對し  
て、「なかはん」と和らげる言葉は、いかにも心解け  
て奥底もない様が見える。この長崎國訛にも某林子  
の蓋妙な言葉遣に、九右衛門の心境の變化を見せて  
ゐる事が味ははれる。

○氏神殿 諏訪神社をいふ。

○本踊いろ 歌舞伎風の踊やらの意。「いろ」は  
既出。

たべるは一門同然、サア御手上げられ、此五人は我等が仲間、他事無ふ咄明かす  
中、近附に成てお咄なされ、斯ふ申某は長崎者、九右衛門と申てそつと致ゐた  
唐商賣、是は同國彌平次と申仁、次は上方小倉屋傳右・難波屋仁左、其許呼に參  
つたは、阿波の徳島平左衛門と申て髪月代致さる、船中の事缺き心置かずとお  
頼なされ、して其處許は何國何方、「我等も生國長崎、悴の時分親に連れて生れ  
所を引越し京住居、父が名は小町屋惣左衛門、同名惣七と申者、賣買のため筑  
前へは毎年の下り上り、何方も船中平懐御免、好いお近附求めし」と禮儀仕舞へ  
ば膝崩れ、詞直せば寢腹這い早千年の馴染程、心解けたる朝霜の奥底もなく成に  
けり、九右衛門顔色打解けて、船中の淋しさ物語程伽に成物はない、己どもが二  
十七の年、薩摩者と喧嘩した咄、嘘じやなかばん聞かつしやれ、九月の七日九日  
は氏神殿の祭、本踊いろ唐子踊いろ、見事な事ばん、本興善町といふ所で石御器  
に一二杯、肝の束へ諸白をいつかけた薩摩二才、太か男であつたばん、諏訪へ踊  
見がい行く行違ひに、長か赤鯉の小鐘がくさの、己どもが脇腹さなへ當るが最期、  
引撮んで壁を掻いなすらふと思ふて、小鐘を逆手にやつくるり、それは〜見事

○唐子踊 唐風の衣装を著け、唐児に扮粧して踊る。こ。諏訪神社の祭禮は長崎大名物の一で、昔時は九月七日大波止場假屋の御旅所に渡御式があり、年番町の子女踊を盡して著飾り、御祝儀蓋等の寶物を捧げ、夥しい行列がある。九日は遣御の日である。七日、九日は本踊、唐子踊などが最も盛んであった。

○本興善町 長崎にある町名。諏訪神社はこの町よりも北方にある。

○石御器 茶碗。

○肝の束 臟腑は束ねたものと思ふた語。腹中。○諸白 醇酒をいひ、麴も米も諸天に精いたのを用ひて醸すよりの稱。

○いつかける 「ひつかける」の「ひ」の子音のこれた長崎國訛。この語現今も長崎や鹿児島地方で用ひてゐる。ぶつかける。飲む。

○薩摩二才 現今九州地方で「さつまにせ」といひ、薩摩生れの武骨者の意にいふ。「二才」は健兒といふ程の意。

○太か男 太ふまゝの男の義。太い男。肥大な男。この語現今も長崎・鹿児島地方で用ひてゐる。

○諏訪 諏訪神社をいひ、長崎の東北高地にある。○がい 「がてら」又は「に」の意にいふ長崎國訛で、現今も用ひられてゐる。熊本では「ぎやあ」といふ。

○長か 長いの意にいふ長崎國訛。「長か」の「か」は「太か男」な「いふ」に同じ。

○赤鯛 赤鯛とされる鈍刀。以て刀を罵つていふ。

な事であつたがのふ、他國者に投げられては國へ歸つても成敗、死ぬる命は何處でも一つと、二尺八寸引抜いた、コリヤン、ほたゆるなと又引かづいて投げたがの、角のある溝石でくさ、頭の皿が粉々微塵に打破れた、ヲ船では破れたといふは忌々しい、頭の皿が走つた、血が走いろ涙が出るいろ、頭抱へて雇人にかろわれ、小宿さなへ往んだがの、今で思へばむぞうらしげに、そがいにせでも大

○くさ 語尾に添へて強く指示する義をなす長崎國訛。現今も福岡地方で普通に用ひられ、「ねえ」又は「なあ」といふ意に用ひるのが一般である。熊本地方では「くさい」又「くしやあ」といふ。

○掻いなすらう 擦附けてやらう。「掻い」は接頭語。○逆手にやつくるり 逆手に纏んで、やつくるりと振ち廻して投げ倒した。

○成敗 刑罰を加へること。こゝでは制裁を受けて新業でたれることをいふ。

○ほたゆる ふざける。「薩摩茶」に「ほたゆる」俗語なり、ほたゆるともいへり、える、反ゆなり、されたはむるを上方にほたゆるといふ。

○かづいて かつ「捲」きて。「日本水代紙」卷三、煎じや常とは變る開業の條に「番匠、重に鉤屏木屑をかつせけるに」。

○頭の皿 頭蓋骨。○走つた 割れた。鎌ひびが入つた。中國地方では、桶

なごに練の入るを、「はしれる」といふ。舟中では水さいふを忘んで開働「あか」といひ、練の入るを思んで走るなといふ。「藝經千本櫻」第二に「兼明微塵にはしらかし、命を取り」。

○かるはれ 背負はれ。「町人袋」卷三に「かるふ」からふなり、「負」おふをいふ、おはれたしいふ事をかるはれふといへるも、かるふおはれふといふ事なり」。この語は現今も長崎で往々用ひられ、「子供を背負うて」といふを、「子供をかううて」といふ。

○むざう むざん(無愁)の稱。不便(ふびん)稱れむべきこと。「町人袋」卷三に「むざう」不便なるをいふ、謙忍なるべし」。この語現今も九州地方で用ひてゐる。

○そがい そのぐあひ(其工合)の約説。そのやう。「物類稱呼」卷五に「そんなといふは、そのやうな也、肥前佐賀にてそがいといふ是なり」。

○なかつたん 長崎國訛。「なかつたに」の意。現今も佐賀・長崎地方で用ひてゐる。

○好かけん よろしい。よい(宜)といふことを、現今も九州地方一般に「よか」といふ。またこれに「はい」「けん」を添へて「よかはい」「よかけん」といふ。「もうよろしいを」「もうよかけん」といふ。

○こが い、このぐあひ(此工合)の約訛。このやう。

○仕形交り 身振手真似を交へる(ツ)。○次第々々 順次に他の者にも。

○色所 淫美な所。

○譯分 分とも書く。戀のいきま。情事。

○乗すれば 口車に乗せれば。おたてれば。

○吟味強く しらべただすことが嚴重で、とりしまり厳しく。

○鑑ひらな 鑲鏡の二鏡半鏡。「鑑」は羅金「わがねの合字。鑲鏡をいふ。「ひらは片又は枚の意。「なかはなかは即ち半分をいふ。

○抑もより 最初から。

○身請 遊女をうけたす(こ)。落籍。

○報問 遊客と遊女との問を補助して、酒の相手となり座の興をすめる者。蓋し大盡を普通より大神に寄せて、其の太鼓を持つもの義よりいうた語であらう。

○大盡 經城買の上客をいふ。蓋し大身の經儀であつて、寛濶によそはふ客なるによつて稱したものであらう。

事なかつたん、上方衆は氣が好かけん、こがいな事はあるまい」と、仕形交りの高咄

皆安閑と聞居たる、サア京のお客お話なされ、次第々々に所望せん、上方は色所

定て深い譯がある、お咄あれ」と口々に乗すれば乗て「されば、親密左衛門

吟味強く、京大坂では鑑ひらな我物で我儘ならず、毎年の筑前通ひ幸に柳町

の小女郎とは、抑もより互に逆上り、是非當年は請出して、女房に持る、合點持

約束」と、半分聞て「ア、おつしやるな聞迄ない、我等も博多へ参る者此一座五

人が、小女郎殿の身請の報問、大盡くはつとおはづみ」と毛剃が起て膝立れば、

「よふく身請の大盡様」「こりや誰が大盡ぞ」「小女郎様の大盡」と一座がば

らりと取廻し、座興も過ればむつとして、騷るか但侮るかと、心くる咳たく

る胸を押へて、ゑへん、今朝から風引頭痛致す、跡の咄は後刻、何方も

これに」と挨拶し、思ひ惱みつ立ち煩ひ漸下へ這下る、身請する程内證か暖か

で、風引とは何處やら足らぬ和郎そふな」と、悪口苦口小倉口より、波押切て

来る早船目當の一文字、眞黒に成て漕ぎ附たり、九右衛門始め立騒ぎ、ヤア三藏

市五郎、首尾は、近年の拍子よく、荷物受取金渡し彼方も機嫌此方も仕合、

○はづみ 「はずみ」とも書く。ふるまふこと。祝儀を書かせよとの意。

○よう／＼ 人をほめ難し立てる感動詞。「心二河白道に、よう／＼、やつちやまほめ給へば。」

○くる／＼ 咳たぐる。しほ／＼咳をする。「俚言集」に、「咳なびく出るをタクル云。」

○どなたもこれに 心なだも愛にゆるりとし、てお話をされ、私はお先に失禮します。

○和郎 やつこさん。「標訓」に、「わろ」俗語にはわろうともいふ、わらはの訛なるべし。

○小倉口 豊前小倉方面。「悪口苦口小倉口」は同脚韻によつた、即ち脚韻法。

○一文字 一直線。わき目も振らずまつすぐ。

○眞黒になつて わき目も振らず一心になつて。心がその物のみに凝らばれて、周囲が見えぬよりの事。

○手形 受渡證書。

○かこ 櫛(か)か(こ)の略。

○まつかせ 「任せ」に促音の添はつた語。引受けた。承知した。

○海老手の人参 朝鮮白頭山に産する人參で、船色を帯び、尾端曲つて海老の形に似たれはいふ。

○人參とは、この草の根の形が人の参(ま)まる。

荷敷手形に引合渡しませふ」と聞嬉しき、船頭起きよ、舟子も来い荷物請取れ」

「まつかせ」と、心も勇む「虎の皮百五枚、仕合すれば氣の藥、海老手の人參五箱で

三十斤、仕損ずるは手廻しの緞子七櫃二百本、船から船へ移の麝香四十斤、」何

と遠見に見附られはせなんだか、」氣も無い事言わ紗縞緞が十五箱、さりながら

六絲緞の縞子が十二丸、世話人た漆七桶運の強いは一昨日の夜の月影、照のよい

鼈甲百斤、まつ斯う仕済し歸りました、天地の恵み明星程な珊瑚珠が八十粒、

手形の表是迄渡しました、此一通は來夏船の割符、迎ひ船にお出なされとの言傳」

形をしてあるよりの名であつて、高貴の藥料である。詳しくは「和漢三才圖會」草類人參を見よ。

○緞子 「和漢三才圖會」綿布類に、「閃緞(ぶんす)自南京東阿蘭陀(アモイ)而來而廣東(カウ)上、地厚織文繁多、以埃爲(埃衣)」。移の麝香 麝香を最上品とする。煉粉の如きものを移

麝香といふ。和漢三才圖會「卷三十八、麝の條に、今所渡麝香、雲南者爲上、東軍者爲次、福州南京又次之、有真偽數品、難明、大抵麝香爲最上、有皮膜(膜)之、一箇重自五錢可(八錢)、一種赤皮膜、如(煉粉)者、名傳染(う)し麝香、其赤黑色云々」。

○遠見 海上を遠見して監視する役人。

○氣も無い事言は紗縞緞 まやうな氣配は少しも無い事か言はしやるを、紗縞緞にいひかく。

○六絲緞 縞子に似てるので「六絲緞の縞子」といひ、巻軸

にしてあるので「丸」というた。「和漢三才圖會」卷十七、六絲緞の條に「六絲緞出於廣東稱(福建)、似(八絲緞)しゆす」而絲寡故名、其光滑亦稍劣、云々。六絲緞(むりやう)しに、無量に氣遣つた意をいひかく。

○世話入れた 手数をかけて精製した。

○漆 薬に入れる所乾漆をいうたのである。

○照 光澤。つや。そして「月影」を受けた。

○明星 金星。「和漢三才圖會」卷一、天部に「太白(金星)按太白俗云明星也。」「惠みかやう星」と同音の修飾。

○おませ 飲ませ申せ。  
○下されう いただきませう。

○相仕 共に仕事をする者。共に事を爲すの仲間。

○京の奴 小町屋惣七をさす。

○垣立 「和漢船用集」巻十に、「垣立一舟の左右に立垣なり、高垣半垣あり、荷舟檣垣丸垣等あり、云々。」

○頬折叩く 口をたたく。しやべる。密貿易をあはくをいふ。

○ほたり込む はふり抛込む。投げ込む。この語は現今も長崎地方で用ひられ、又鹿児島では「ほたい込む」といふ。

○下人 小町屋惣七の下人。

○まつかせこんだ よしきた吞込んだ。心得た吞込んだ。

○部切 船内を仕切しきつた板。「和漢船用集」巻五に、「部切へきりし舟に義をいるるに幾間も仕切あるの名なり、此ゆゑに間船(まぶね)とも云」とある。部切の義これより明かである。

○これわいな 勇氣をつける拍子聲。

○傳馬込 荷船の表の開口(かいのくち)の別稱で、傳馬舟(端舟)を引入れる處。「和漢船用集」巻十、船處名之部に「開口(かいのくち)明律考水仙門ミウのまの門ミ調す、表のかいの口なり、或は通口ミ書、軸線左右にあり、荷舟にて表の開口(かい)の口傳間込(てんまご)云々、傳間を引込處也。」

と、渡せば取て推戴き、手柄高名休み召され、二人の衆にも酒おませ、「おめでたいお頭様、御褒美をしつかりと、御酒も祝ふて下されう」と、皆本船に乘移る、九右衛門相仕等招き寄せ、小聲に成て「いづれも見ずや、荷物を船へ積折から乗合の京の奴、垣立より顔差出し、合點行かぬと思ふ頬付、生けて置たら頬折叩き、後日の難儀見る様な、切殺しては大事の門出血を見るが忌々しい、絞殺して海へほたり込、下人めも有そふな油断すな」「まつかせ込んだ」「皆の衆抜かるな」「心得た」と、鉢巻襷尻褰げ、「腕骨試し力試し、間の部切を小楯にて時分を窺へサア来い」と、櫓下るゝも忍び足、所は沖つ潮風の外は一味の船の中、聞人もなし見る人なし、人は知らじと思ふこそ、結句身の上知らずなり、下人が喚くまつかせ聲、櫓の上へ躍り上るを追續いて、彌平次・傳右衛門二人が中に取捲いて、宙に指上「是わいな」と、投げ込波の哀れや下人底の水屑と成にける「サア一人は爲てやつた、惣七めが見へぬ捜せ」と、コリヤと爰に傳馬込に」といふ聲に、惣七水棹押取て狂ひ出、「ヤア海賊めら、様子一々見届けた、死ぬる共一人死なふか」とそつばう滅法打立つる、後へ廻つて市五郎、透を窺ひ掴み附けば取て投げ、



○そつばう 「そつばう」外方の約。ほかの方。法外。めちや。

○取つて投げ 「この文は、惣七が市五郎を取つて投げ、市五郎は投げられながら、惣七の足首をしまき取り、惣七を真逆様にの意。

○オでんどう づでんたう(頭顱倒)の義。ひつくりかへるこゝ。

○捲りかけ 烈しく煽みかかり。「捲りは烈しい動作を表はす意の語。この文は、波音に紛れて烈しく煽みかかつたのである。

○だんばらば 水中に物の落ちた音。但し(一)は傳馬の中に落ちた音を、水中に落ちた音と聞いたのである。

○中々に 傳馬舟の中と、なまじひにこの意をいひかく。

○反 次である。但し近松は一反を十五間程と心得てゐる。

○是から 此處から。

○えいさつさ、えいや 鶴を漕ぐ時の掛聲。「まつしつし、ししまつしつし」といふ。

○三重 三味線の三重の調子は、人の聲では出ぬによつて、「漕いで進むを略した。

○いひきにて：うわうわう 「坂橋松の落葉巻四、唐人踊の唄に、「いきにて」すいちやゑんちやすいちやすいふうちやういさらこわいめさはんやさそうわう／＼うちたるまたひさらこわいめさはんやさそうわう／＼うあう／＼とある。「唐書和解醉胡樂の唄に、「更裡天一再裡天

投げられながら足首をしつかと取、真逆様にすでんどう、どうと響く波音に捲りかけ、大勢かゝつてだんばらば、邊も知れぬ海の中真逆様に打込んで、サア仕済した目出度い」と笑ふ聲、惣七はつと心附見れば傳馬の中々に、物音せば悪からんと、纜解いて艀を押立、悪魚毒蛇の口よりも遁れ難き場を遁れ、一反ばかり漕出く、「ラ皆々骨折く、惣七是からお禮申、此返報は重て」と、心急げばゑい

さつさ、ゑいや運は傳馬にあり、押すや艀腕の續くだけ命、限りと

「いひきにて、く、すいちやゑんちや、すはひすふいてう、ひいたらこはいみ

さいはんや、さんそ、うわうわうく」ア、措きや措きや、なふ欲市殿其拍子

では踊られぬ、錢太鼓の三味線知らずば知らぬと頭初から言ふたがよい、長崎の

伊左衛門様とは違ふた物、もう踊らぬぞや、」それで藝が上達する物か、三味線引

月點紗窓人未眠云々」ミある。柳町の奥田屋で座頭欲市の歌ふ唄である。

○欲市 座頭の名。座頭とは、盲人の髪を剃り、三味線を弾き、唄を詠つ酒宴の座頭を助けたもので、暫問の一種である。

○錢太鼓 扁圓な小さい太鼓。豆太鼓。「好色二代男(貞享元年刊)巻二に「此所(六角亭)は浴中のお乳の人の樂り遊び所なり、錢太鼓、唐人笛の響竹馬の餘の音、もの敷しき中へ。近松のこの文は、兎二人が錢太鼓の音に合はして唐人踊の聲古を

してゐたのを、欲市が三味線を聴いて邪魔をしたのである。錢太鼓の三味線」とは、錢太鼓の拍子に合はせて弾く三味線の意。唐人踊であるから錢太鼓を持つて踊るのである。

○長崎の伊左衛門 藤屋伊左衛門は有名な粋客であつて、大阪新町馬屋の名妓夕霧と情交密であつたことは、近松作夕霧阿波囃渡にも仕組まれてゐる。其の伊左衛門の名を取つて、長崎の粋客毛剃伊左衛門の姓名とし、其の人なら唐人踊の拍子も上手であるといふのであらう。

○禿 遊女に仕へて將來遊女になる子飼の少女。

○足掻く 兎窟がいたづらしてはね廻る。

○遣手 禿や遊女の腰をなし、且つ監督し、又揚屋で諸事の取持をする女で、赤前垂をなし、腰に鐘を吊してゐた。

○重の丞 禿の名。

○身揚り 我が身で我が身を揚げる義。遊女が自分が掲げられる時の金を自分で拂つて、客に對する勤めを休むこと。

○太夫 最上位の遊女。ここは太夫の階級にある小女郎をさす。

○錢太鼓稽古して 錢太鼓を鳴して唐人蹄の稽古して。

○しやりんす するのであります。

○錢太鼓がなほ悪い 靜かにしてゐるべきに鳴物入りで踊るから、なほ悪いといふのである。

○宰府 筑前國筑紫郡太宰府町。

○やつちや 販出す時の掛聲。おつち来た。

○一角せしめん 金一步の祝儀を貰はう。一步判金は長方形であるから、これを一角といふ。

○百年經ねど衰へは自身の上に小町屋惣七 講曲 卒都婆小町に、嬉しからぬ月日身

止む迄サア〜踊りや」といひければ、「なんばでも踊らぬ、三味線止めて貴方も石碓か跛引かしやれ」、「何じや跛引け、盲目と思ひ侮るな、目ニツ持た汝等に、いで物見せん」と三味線振上聲を當所に追廻す、亭主奥田屋四郎左衛門臺所から立出、「こりや何じや欲市、たしなめ大人氣ない、禿共も足掻いたら遣手に告げて叱らすぞ、ヤイ重の丞、けふは小女郎様の母御の十三年忌、追善の爲身揚りして、小女郎様は奥の間に經念佛して御座るでないか、附いてゐる太夫様の親御の事、線香でも立てふと思ふ氣は無ふて、盲目相手に何事じや」、「否々私共二人錢太鼓稽古して居たりや、欲市の三味線で邪魔しやりんす」、「其錢太鼓が猶悪い、物の稽古も時が有奥へ往て附いて居よ、二人ながらとつと、往け、コリヤ欲市、表の二階に宰府の源様が來て御座る見舞ふたか」、「やつちや一角せしめん」と、人の巾著當にして、囃はぬ先の締括り宰府の客へと取に行、百年經ねど、衰へは、今身の上に小町屋惣七、下の關の大難に命一つを拾ひ得て、博多へ焦れ著しかど身に附物は手足より、外には何の當もなく、知る邊の方へも身を恥ぢて訪ひ音づれば絶へしかど、小女郎が情忘られず戀しき、風の吹立る、柳町には來たれども、

に横つて、百年の絶えなりて候」とあるに據つたのである。

○戀しき風 戀情の催すを、風の身にしみわたるに喩へていふ。戀情にあふられるを吹きたつるといひ、風に柳の縁から柳町にいひつづけた。

○つかうと 「つかう」も「つかう」も書いてある。「つかう」も「つかう」も書いてある。「つかう」も「つかう」も書いてある。

○偽なしたり しまつたり。近松作「五十年忌歌念佛」下之巻に「南無三寶しなしたり」。

○風俗 容姿。身なり。「好色」代男卷二に「近江橋一反裁合はせは風俗も見よきに、残して何の役にも立たざりし」。

○思ひ切つた顔見まい 小女郎に逢ふこゝは思ひ切つた、小女郎の顔を見まい。

○志 手向けを志すこと。追善。近松作「女殺油地獄」下之巻に、「三十五日お連夜の心ざし、お同行衆寄集り、勤めも既に終りける」。

○かなぐつて かなぐりすて。手をかけて急いで取りのける動作をいふ。

金銀なければ肩窄り己と心奥田屋の、門を覗いつ退いて見つ案じ佇み居る風情、内には「乞食」と尖り聲、餘り物は遣つて仕舞ふた通りや、とつかうどなり、扱は早物囉ひと人目には見ゆるよな、成果てたり爲なしたり、此風俗で小女郎に逢ひたいと云ふたりとも聞入れじ、聞入てから小女郎が恥、思ひ切た顔見まひ」と立歸る後より、「ヲ、待ちや」と重の丞、「コレ今日は太夫様の志の日に當り、施の一錢」と差出しながら「ハア此乞食はお絹布を着て居る」と、顔差覗いて「ヤアお前は京の惣七様、なふ太夫様惣七様の乞食に成てごんした」と、呼ばはれば播振つて逃るを「往なさぬ待たんせ」と、帯に纏つて止むる間に、家内も驚き駈出する小女郎は表に走り出、笠かなぐつて「本にそふじや嬉しや能ふ來て下んした、此有様はどふぞいの」と、何の様子も聞ぬ先から泣涙、「コレ四郎左様奥へ連れまして咄たふ御座んす」、「如何にも」お馴染の惣七様、御用あらば御意なされ」と亭主が情に打連れて、入より早く緋り付、戀しゆかしは言わひではぬ筈、お前の心に此小女郎はまだ傾城じやと思ふてか、此身は廓に居るとても

○肩裾結び 肩や裾の衣のやぶれを結び。敵衣を著てゐるを示す。惣七が奥田屋の門に立つた時に、重の丞が乞食と見たも無理はない。

○彼の世 冥土。

○はら／＼ 涙をはら／＼とこぼし。

○惣七は、愛人が自分を思ふ切な真心を聞き、其の哀婉な姿を見ては、情に動かされて、何もかも打明けざるを得なかつたのである。

○實は涌き物 實は得ようとするれば得られる物であるとの意の誇。

○たんと 甚だ。蓋し「足」たりぬとの約である。「たぬぬ」「たんのう」も「足りぬ」の轉じた語である。

○若ながら上著ふはと被せ 小女郎が著てゐる上著の中に惣七を包み入れ。

○金 軍歌の裏唄「うらがね」で、衣裳に惜しまず出した金ミをいひかく。

○さるせ 葡萄牙語 Saria (英語では Sarsaria)。舶來の毛織物で、現今はカーシムゴ。

○羅紗 葡萄牙語 Rana。舶來の毛織物。

○すためん 和蘭語 Stammer。舶來の赤い毛織物。

○かるさい 葡萄牙語 Cartsea。毛織物である。

○らんけん 和蘭語 Laken。羅紗をいふ。

○びろうと 葡萄牙語 Veludo。舶來の絹織物。

○渡り物 外國から渡來した物。舶來品。

心は疾ふから女夫ぞや、肩裾結び手を引て、人の戸口に縋るとも交した詞違やせぬ、今日は母様の十三年の命日、お前に逢たは親達が、彼の世から手を取ての引合せ、女房無事に暮したかと一口言ふ事ならぬか」と、眞實見ゆる涙の玉男もはら／＼聲震ひ、小女郎息災にあつたの、一年振に顔を見て、好い姿も見せ好い事も聞する事か、聞てたも毎年の如く諸色を仕込んで下る所、下の關にて海賊船に乗合せ、家來は眼前海へ沈させ、我命さへ這々の仕合にて此所迄逃延び、商賣の荷物衣類は其儘船に捨置、肌は一錢貯へなければ二度に二つの下著を賣て、今日迄の露の命を繋ぎしぞや、此度の下りには請出し、女房に持たんとその深き契約其金銀も人手に渡し、詞を違へ望を叶へぬ我本意無さより貴女が恨みん心の不便さに、言譯やら顔見にやら、見苦しき身も恥ず、爰へ來て面目もなき物語」と涙に聲を疊らせり、能ふ打明て下んした、實は涌き物お命さへあるなれば、私や嬉しう御座んする、私が心でお前一人はどうなと成おいとしたり肌寒がる、御顔がたんと細つた」と、著ながら上著ふはと被せ抱締め、てこそ泣居たる、表に血氣の下男、「大盡様の御來臨」と鳴り喚く「ヤレ人が來る此方へ」と、男の手を取身を寄

○襟界 せまかひ えりくび(領頭)が其の界なるによる。

○ちくら ちくら 韓(から)と對馬(たにま)の間にある巨濟島(きよしま)を昔は瀆(とく)盧(ろ)と云うた。ちくらは瀆(とく)盧(ろ)の轉(てん)語(ご)であらう。ちくらは韓(から)と日本(にっぽん)との潮(うしほ)界(がい)によつて、ちくらともつかぬこといふ。狂言(きやうげん)「遊(あそ)ぶ大名(だいみょう)」に「唐(から)と日本(にっぽん)の境(さかい)にちくらが沖(うしほ)といふ處(ところ)がある。」

○てくら 「手暗(てくら)」であつて、手(て)も目を暗(くら)ますこと。義(ぎ) 人目(ひとめ)をじまかすこと。

○一夜檢校 いちやけんぎょう 檢校(けんぎょう)は官人(くわんにん)に授(たづな)けた最高の官(くわん)で法印(ほふいん)に准(た)じる。官人(くわんにん)が金千兩(かねせんりやう)を上納(じやうなう)することによつて檢校(けんぎょう)になる事ができたので、まうしてなる檢校(けんぎょう)、所謂(すゐじゆ)一夜(いちや)づくりの檢校(けんぎょう)といふことが、轉(てん)じて俄成金(わかぢきん)のこといふ。

○差配 さばい 處置(ぢぢぢ) 取扱(とらへ)ひ。元締(もとぢ)。

○端せせり たんせせり 端女(たんめ)郎(ら)下位(げゐ)の遊女(あそびめ)と戯(あそ)ぶること。端女(たんめ)郎(ら)を掛(か)けて遊興(あそび)すること。

○太夫狂 たふきやう 太夫(たふ)に心を奪(さら)はれること。太夫(たふ)を掛(か)けて遊興(あそび)すること。「太夫(たふ)は最上(さいじやう)位の遊女(あそびめ)。」

○物言ひ伽 ものごと 話(わ)相手(あひま)。

○殿い どのい ひびい。羨(うらや)ましいと、聲(こゑ)いたのである。

○走り はしり 足(あし)走るに、走り書(はしりかき)をいひかく。「走り書(はしりかき)とは、筆(ふで)を走(は)る屋(や)の草體(くさてい)に書(か)くこと。」

○花草 はなくさ 色茶屋(いろぢや)の主婦(なづま)をいふ。遊女(あそびめ)を花(はな)に喩(たと)へて、花(はな)を廻(まわ)らす意(い)の稱(なづ)めの説(せつ)がある。ここは奥田(おくた)屋(や)の主(な)人(ひと)四郎左衛門(しやうざゑもん)の妻(つま)をさす。

○油斷 あぶらだん 注意(ちゆい)を怠(おろそ)かすること。「淫樂(いんがく)經(きやう)」に、印度(いんどう)の暴王(ばうわう)が一臣(いちしん)に油鉢(あぶらひち)を持(も)たせて行(い)かせ、油(あぶら)の一滴(ひとしずく)をこぼしても首(くび)を刎(き)ねるといつた故事(こじ)から出(で)た語(ご)。

せて奥(おく)の一間(いっま)に入(い)りける、客(きやく)は過(す)つる海賊(かいぞく)ども、眞(ま)先(ま)立(た)て毛刺(けざり)九右衛門(くさゑもん)、「彌平次(やへいじ)・傳右(でんえ)・仁左(にざ)・平左(へいざ)・市五(いちご)・三藏(さんざう)サア御座(ござ)れ」と、引摺(ひきず)る雪駄(せつだ)の金(かね)に飽(あ)かした衣裳(いしやう)附(つき)、各々(おのづか)さるせ羅紗(らしゃ)すためん、かるさいらんけん繻子(しゆし)天鵝絨(てんがじゆ)・下著(したぎ)上著(うへぎ)も渡(わた)り物(もの)、頭(かぶ)は日本(にっぽん)胸(むね)は唐(から)との襟界(せまかひ)、ちくら手(て)くらの一(いち)夜(や)檢校(けんぎょう)、終(ついに)に目馴(めな)ぬ出立(いで)茶(ち)へ、奥田(おくた)屋(や)に搖(ゆ)ぎ込(こ)み、座敷(ざしき)に居流(いなが)れ毛刺(けざり)が諸色(しよしき)受込(うけこん)で、差配(さばい)らしげに物體(ぶつたい)顔(がほ)に測(はか)りていぬす、日(ひ)からは太夫(たふ)狂(きやう)ひ、來(く)る道(みち)すがら見(み)て置(お)いた一(いち)文字(もんじ)屋(や)の江口(えぐち)、丸屋(まるや)の勝山(かつやま)同(どう)じ家の(け)薄雲(うすぐも)、油屋(あぶらや)掾(じやく)・和泉屋(いずみや)小倉(こくら)、車屋(くるまや)の大磯(おほいそ)、此(こゝ)六人(むつしに)を請出(うけだ)して、是(こゝ)に居(い)らる、人々(ひとびと)の物言(ものごと)ひ伽(が)、明日(あす)迄(まで)待(まち)たぬ今日(けふ)の中(なか)に首尾(くびび)させい、「一(いち)是(こゝ)は殿(どの)い」と四郎左衛門(しやうざゑもん)飛(と)んで出(い)るを「やれ待(まち)て、亭主(ていしゆ)が留守(くせう)では興(きやう)がない、云(い)附(つけ)て呼(よ)びにやれ、一(いち)畏(かしこ)まつた」と視引(しりり)寄せ書(かき)き附(つけ)て、呼(よ)びにやる足走(あしはし)り書(かき)「早(あ)う往(み)て來(こ)いお吸物(すいもつ)、大座敷(おほざしき)も一つにせい、子供(こども)泣(な)かすな女房(にようばう)どもに藥飲(くすりのみ)ませ、一(いち)ヤ何(なん)じや花車(はなくるま)が煩(わづら)ふか、それ挾箱(はさみばこ)持(も)つて來(こ)い、油斷(あぶらだん)召(め)されな人參(にんじん)用(もち)ひて養生(やうじやう)が第一(だいいち)、持合(もちあ)はせはづもふ」と蓋押(ふたおし)開(ひ)き一包(ひとつか)、一つ選(えら)りの大人參(おほにんじん)一斤(いちじん)餘(あま)り投出(なげだ)し、四郎左衛門(しやうざゑもん)子供(こども)は幾人(いくた)ある、「娘(むすめ)が一(ひと)

○分限 「ぶけん」又は「ぶんけん」とよむ。寢堂又は金持の意。

○佐夜の中山無間の鐘 遠州佐夜中山なる青刺宗觀音寺の鐘を撞く時は、現世では福徳長者になれるが、死後無間地獄に墮ちるといふ俗説がある。「世間別業用卷三」に「假令後世は取外し奈落へ沈むとも、佐夜の中山にありし無間の鐘を撞きてなりとも、まづ此世を助かりたし」。

○行法 行者の修法する行ひ。

○長者經 富家になる秘訣の經典の意。寛永四年刊。長者教といふがあり、又西鶴撰の「日本永代藏」の題名の下の左寄りに、「大福新長者教」と細書してある。近松もこの名を襲つたのである。

○横手を打ち 掌を打ち合はすをいひ、これはと思ひ當る時にするわざである。

○せがみ立てられ 強ひて請ひ立てられ。

○嘘八百 偽りの多いことゝの意の諺。

○濫觴 原始をいふ。「孔子家語」三恕篇に、「江始出于岷山、其源可謂濫觴焉、さかづきをうかぶ」とあるより出づ。

○月蓋 印度毘舍離國の長者の名。佛に歸依し彌陀三尊の像を鑄て祈念し、以て國中の惡疫を除いたことが「諸經音釋」に見えてゐる。

○示さん 佛法の奥義、菩提の道を示さう。

○頭陀の行 諸方を行脚して米錢の施與を乞ふこと。「頭陀」は梵語 Dhuta である。料理と譯す。煩惱の塵垢を去り、清淨に佛道を修する事をいふ。

人男が二人御座ります、  
「ヲ、好い子持、小さけれども此珊瑚珠、對で秤目が八  
匁二人の子に提さしやれ、お娘が著物に有合はせ緞子三本繻子五本、此緋縮緬裏  
に好からふ」、綿の代迄相添へて、投出す擲出す戴くに亭主が腕を草臥れける、四  
郎左衛門ぎよつとして、「お禮より先肝が潰る、何時の間に此様な大分限者にお  
成りなされた」と、問詰められて間に合詞「嚴いかく」、江戸商間緩く、佐夜の中  
山無間の鐘、撞き當てた福々長者さりながら、此鐘撞くには行法がむつかしい、  
長者經とて、寺に傳はる縁起の目錄聞せたい」と打笑へば、亭主横手をはたと打  
扱有難いお經、我等もちつとあやかる様に、其お經授け下され」とせがみ立ら  
れ、然らば聽聞仕れ」と何やら知れぬ懷帳、殊勝らしげに取出し吝い事の嘘八  
百、長者經と擬へ聲張上て讀みにけり、

長者經

「そも此、無間の鐘の濫觴を尋ねれば、天竺の大金持、月蓋と名に高き、扱も  
吝い長者有、佛是に示さん爲朝なくの頭陀の行、鉢々も空耳潰しうんとも、す  
んとも言はれぬ佛の方便にて、光はさながら、一分小判の山吹色、金と見るより

轉じて行脚の意にいふ。

○はつち〜 はち〜(鉢々)に促解の添はつた語、托鉢坊主が門に立ち、はつち〜とさうして施物を乞ふこと。

○空耳漬し 月蓋長者は釋尊のはつち〜を聞いて聞かぬふりをなし。

○光 佛體に塗られた黄金の光をさす。

○手の内 頭陀の行者に施す米錢をいふ。世間胸算用「卷一」に「毎朝修行に出でしに、一町にて二所づつ手の内、二十所を集めて漸う一合ありし。

○仕懸けられ 籠絡され。

○まづ初夜の鐘：現世にては分限の金持 諸曲「三井寺」に、「まづ初夜の鐘を撞く時は諸行無常と響くなり。後夜の鐘を撞く時は生滅法と響くなり。晨朝の響は生滅滅已、入相は寂滅爲樂と響きて、菩提の道の鐘の聲、月も數添ひて百八煩惱の眠の驚く夢の世の迷もはや盡きたりや」とあるをもつたのである。「諸行無常、生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」は「涅槃經」に出てゐる四句偈である。其の意は、一切の萬物は因縁所成のものであつて、常住不變のものでない。この故に生滅の法あり。その生滅の境を脱してしまひ、涅槃(佛界)の妙境に達すれば、常樂我淨があるといふのであつて、佛敎の大道を間違へるものである。寺鐘の響にこの四句偈の意があるといふ。弘法大師は、この四句偈を「いろは歌」に作つた事は人の知る所である。

「初夜」は戌の刻午後八時頃をいひ、「後夜」は寅の刻午前四時頃をいひ、「晨朝」は卯の刻午前六時頃をいふ。

客坊長者、佛の箔を剥さんと、欲から入る手の内を釋迦の手管に仕懸けられ、惜しや悲しや南無阿彌陀佛、此撞、鐘を建立す、されば穢い長者の心末世の今に留まつて、先初夜の鐘を撞く時は、諸行無常に惜しや〜と響くなり、後夜の鐘を撞く時は是生、滅法な事と響くなり、晨朝の響は、生滅滅多に入用知れず、寂滅入らざる鐘の聲、一文呑みの百八煩惱此鐘の音を聞人は、現世にては分限の金持未來にては、無間の釜煎斯かる不思議の撞鐘を疎かに撞くべからず、扱行法の次第と言つば組も袖も著ることならず、木綿蒲團も榮耀の至荒薦ひいて起き臥しの、身は習はしよ奈良茶粥、精進潔齋菜入らず、晝夜にたつた二度の節季は尻塞げ、往

○一文呑みの百八煩惱 「一文呑みの百損」といふ謠に、「百八煩惱」をいひかく。  
○百八煩惱 佛法で人心の迷惑の數を百八とする。即ち六根(眼耳鼻舌身意)が六塵(色聲香味觸法)に對して三十種類の業が生じ、更にこれが過去・現在・未來に互つて合計百八の煩惱がある。なほこの文は、鐘に金をきかせて、無性に金を惜しやと思ひ、金をつかふ事は滅法な事となし、滅多に人用の知れぬ入らざる物に金を費すべからず、餘りしはくする事知つて一文呑みの百文失ひになる事があるとの意に、百八鐘、百八の數は一歳の義である。即ち十二月二十四氣七十二候、合計百八となる。百八鐘は、晝夜を破り、眠りを驚める爲といふにいひかけた。

○無間の釜煎 無間地獄(饑餓の罪人が間斷なく苦痛を受ける處なるによつていふ)に墮つて釜煎にされること。  
○次第といつば 事柄は如何なるものかと言へば。  
○ひいて 「敷」しいての謠(東京地方では「ひを」しに罷り、關西地方では「しを」ひに罷る)ことがある。  
○身は習はしよ 身は習慣によるものであつて、はじめ厭つたことも慣れれば厭はなくなるものよ。『捨遺集』卷十四、戀四の部、よみ人しらすの歌に、「手枕の透間の風も来かりき、身は習はしよの物にぞありける」。  
○奈良茶粥 茶飯に大豆・小豆又は粟などを拵掛けたものをいふ。もと奈良の東大寺・興福寺などで炊きはじめたによつてこの稱があるといふ。「習はし」奈良茶粥は、同じ頭韻によつた所謂頭韻法。  
○二度の節季 一日(晝夜)三度の食事を檢約してたつた二度の食事にするを、金三歲暮の二度の節季にいひかく。

○轉けても：七つ起 轉けてもたは起きずの意に、七つ時(午前四時)の早起をいひかく。そして「七つ」の縁で「質」にひつづけた。

○欲し物 「欲しい物」といふべきをかくいふは、「曾我會勢山」第四に「忙がしい中」といふべきを「忙がし中」といへる類である。

○稼ぐに追附く貧はなし 稼ぐに益乏追附かず、貧を免される意の諷。

○割木 薪。

○灰を取る事勿れ 灰も火勢を増す助けとなるから、灰を取らなさいふのである。

○しべ わらしべ、稻藁の心。現今でも老人などが痿痺のされる時に、藁の藁なごをむして額に貼附ければ癒ることで、之を行ふ者がある。

○差せ干せ：鏝節 雨が降つたら着物を濡さぬやうに傘を差せ、差したら早く干せ、人に傘を貸すなど、傘の保存法をいふ。そして貸す傘を鏝節にいひかけて、「風」の語に應じた。

○薬研 薬種を細粉とする金属製の器具。

○方圖 際際さまり。もさま圖引きから出た語。

○微塵積つて山と成る 「説苑」に「十積成山」。「古今集」の序に「高き山も微の塵ひより成り」。

○身持つ 冗費をはき家計を引締める。

○取おく田屋 取置く即ち懸棄するに、奥田屋をいひかく。

○能はぬ金 我が方に及ばぬ意。

來の中をちよこ〜走、ちよこ〜〜脱けて、落て有物只置な、轉けても

土を掴んで起きるは七つ起、質を取らずは金貸すな欲し物は買はぬが徳、月夜に

夜なべはせぬが損、稼ぐに追附貧はなし芥子を干にも割木の焚き様、必灰を取

る事勿れ、捨てる物は何にも無い、鍋の煤煙では細眉作り、稽の切れは痿痺の妙

薬、水なき井戸は梯子の入物、鼠の尾まで錐の鞘、差せ干せ傘、人に貸すな鏝節、

搦粉木・搦鉢・砥石・石臼・薬研迄、目にこそ見へね貸す度に、減らずに戻る例

はなし、扱其外は愛敬附合、始末貯蓄讀み書き算盤秤目の、上を見れば方圖がな

い我より下を手本として、右の條々守るに於ては微塵積つて山と成、長者の金言

疑なし無間の鐘とは名ばかりにて、現世も未來も背かねば自然と榮る福徳縁起

聽聞、あれ」と語り、

「否とも應とも申されぬ、世界中が此通に身持たら、私等が商賣は取置田屋」と

ぞ笑ひける、座敷の隔は障子一重、彼方の騒ぎひし〜と小女郎が身に應へ、「ア

ア有所には有物かな、五人六人の太夫達請出そふ、何遣ろ彼遣ろ此遣ろと、金銀

財寶は塵埃、父様や母様の貧な暮しを見た時も、能はぬ金が欲しいとは夢程も思



○どんな どのやうな。

○見てや 「見たやしの轉。

○借つて来やせう 借りて来ませう。

○近附は内證人も聞く 常に客に接する者が、其の客が知ふのであるからとて、それは表立たぬ事。無心をいふのは、人に聞かれて恥辱である。

○金貸して 金貸してくれ。

○出口の佐渡屋 「出口は出口町であつて、博多の町はづれ。「佐渡屋」は揚屋の屋號である。

○月よ星よ 甚だしく愛慕するに「いふ。「俚言葉」に「月よ星よ」ながある。「他我身の上」。

○私次第 私まかせ。「次第とは、まかせ又はまの意を示す接尾語。

○線歩み 直立不動の姿勢で餘に足を踏出し歩むをいひ、太夫の重みを見せた歩み振である。

○小女郎の物七に對する愛は、盲目的になつてゐる。それ故に、毛刺に對して、其の素性も疑惑も感ずる事が出来なかつたのである。

○衣紋附 衣服の著振りの意。「衣紋」は、衣服著用の法式の義。近松作「心中宵庚申」上巻に、木挽丁翠丁の役者から釣を取る衣紋附。

○久しいな 久しぶりでござりますなあ。

○揉 もつれ。紛擾。

○才覺 もと「才のおほえ」に漢字を當てて書讀したも。才のよく利くこと。工面。

○粹様 小女郎をさす。「粹」はもと雅であつて、雅意又は雅察の義。轉じて、世間にも使まれて、人情

はずして、今日といふ今日あちらの身請が羨ましく、私や金が欲しう成ました、

仕合の好い人を、妬は道でなければども、どんな男を顔見てや」と障子の透より差

覗き、「ありや私が近附、「まさかの時は心便に成ましょ」と、力を附てくれた人、

金借つて来やせう」と進み出るを引止め、「近附は内證人も聞、女郎の口から金貸

してと身の恥は思はずか、「恥を包むも事によるたつた今言ふた事、來月は筑後

の衆が私を請出すと、出口の佐渡屋と薄約束、お前の下りを月よ星よと待受たり

やこんな首尾、人手へ渡れば私や生きて居ぬぞや、金借つたとて返せば恥にもな

らぬこと、私次第」と振切れば遣るも涙行涙隠して座敷へ線歩み、毛刺が側へ坐

ればばつと衣の香の、四邊の人はうろ／＼と、顔を見合す荒男俄に嗜む衣紋附、

鬼が花見る風情なり、「毛刺様久しいな、私や此方様へ無心に來た、此方らに大き

なもめが出来て、急に身請をして囉はねば、ならぬ首尾になつたれど肝心の物が

ない、かねがねの詞も有此方らの才覺調ふ迄私が身請の成程、金貸して下んせ、

頼やする」と言ひければ、「日本一の粹様金貸して下んせとは言ひ憎い事、二言と

に遠差し意氣なこと。

○言ひ憎い事 言ひ憎い事を能く言つて下されました。

○萬兩でも 萬兩でも御用立て申す。

○下さんなえ 下さるなよ。

○男冥利商ひ冥利 自分は男であり商人である。偶るに於ては神佛の冥々の利益を蒙らぬ法もあるこの意で、自誓の詞。

○いそ〜 心急ぎ進むまにいふ副詞。

○色 女。美女。

○お敵 遊女ながら相手の客をいひ、又客から己が相手の遊女をさしていふ。相方。「敵は匹敵の意。

○よね 遊女。蓋し遊女の顔容が菩薩の如く美しいといふ意よりして、遊女を菩薩と異稱し、又米を菩薩と異稱するより、遊女をよね(米)ともいうたのである。

○をんと 「をんたう(寝當)の約訛。律義一遍の意にいふ。「役者魚系圖大坂之巻、男色と女色と兩替の評判の條に、黒窓が大盡を廻るの自由なるより一座も我がものなれば」とあつて、「黒窓に「おんとうと傍訓してある。

○下の關の 自分は、下の關での密貿易を目撃した爲に海に投込まれ、そして自分の従者は溺死させられた。その被殺の悪事を言はうとしたのである。  
○塚桁利かすな しやべらすな。

聞ぬ、お前の用なら千兩でも萬兩でも、コリヤ亭主、小女郎様も一處に身請行き

たい所へ遣りまする、金は毛剃が吞込んだ、女郎方の見ゆる内、小女郎様借りま

した、飲めや歌へ」と騒ぎ立、ア、待たんせ〜あの障子の彼方らに今言ふた、

大事の男が来て居さんす、連れて来て禮言わせませす程に、毛剃様、詞違へて下さ

んなゑ、「男冥利商ひ冥利虚言御座らぬ、お供なされ」の詞にいそ〜立歸る、

「太夫様御出」と呼ばはる聲、門から色の欄み取勝山・江口・大磯に、寄せ來る

波の大騒ぎ、座敷に一杯入込んで、薄雲さん操さん小倉さん、三人はお跡から」

「そりやこそお敵」と色めいて、毛剃が連ども現を抜かし、顔に餘念はなかりけり、

九右衛門聲掛け「コレ〜亭主、爰にはちつと用が有、よね様方口の座敷へ、跡

から見ゆる太夫方も爰へは無用、「おつと此方へ來給へ」と、亭主に連れて立廻

る女郎も田舎はおんと成、出るもいかゞ出ぬもいかゞ、小女郎に引かれて惣七は、

障子押明立出る顔と顔、互に見合せ「ヤア、小女郎が馴染の男、今思ひ出した其

方が事な、一ヲ、汝等に逢ひたかつた、ヤア人は無いか此奴等は下の關の、跡

言はせじと毛剃が連ども大聲上、「頼桁利すな打殺せ」と、蹴立る杯爛鍋の、轉け

○濡れ 男女の情事。いろいろ。この文は、「たぶく〜」の縁語濡れにつづけた。

○上する女子 掃屋の座敷の取廻しをする女。仲居。

○一寸動き 微動。この文、まがは首魁毛剃の監視を見せた。

○やかましい 面倒だ。

○とつと 「疾」しく疾くとの促音便。

○親仁次第 親仁まかせ。「次第」は接尾語。(見索引)

○跡先知らず どういふ譯で喧嘩するか、その類末を知らぬ。

○物がないぞ 念いのちが無いぞといふ蕪の通言。

○ほうぐ された紙を「ほうぐ」(反故)といふは、逆返すかへして故(も)の紙にするからである。

○心中 眞實の心。

○息がかかる 金の厄介になる。「息は金の力にいふ。」新色五卷巻五に、「抽指が行法なや大方の金の息ではならぬぞかし」とある、金の息も金力の意。「金がうなる」などいふ「うなる」も金の息の盛んなるをいふ。

○取立てませよ 調へませう。

て聲にたぶく〜、濡れから起つた喧嘩そふな、大事にはなるまいか」と上する女子下男、うろつく顔も青ざめて生た心地は無かりけり、毛剃一寸動きもせず、

「ア、騒ぐまい〜、此九右衛門が思案が有、彌平次、残らず女郎衆の側へ行け、

跡は己が受取た」、「否そふではない我々が相手に成、親仁一人心元ない」、「ヤア

此毛剃引け取る男と思ふか、汝等が居れば喧しい、とつと、行け」と睨附れば、

「そんなら行ます、親仁次第」と打連れて、表の、座敷へ出にける、小女郎は跡

先知らず、惣七に引添ふて二人の目元に氣を配る、コレ若い人惣七殿、此中の事

一言云ふても物が無いぞ仰しやるな、此方共の商賣言はずとも見られた通、何事

も身が大事と思ふから、此中の事怵へさしやれ、否と言はしやりや事に成や、怵

へさしやれ、小女郎を此方へ請出すと此方の詞が反故になり、小女郎も可愛や此

方〜と心中を立通し、女郎の口から金貸せと迄恥を捨ての志、無にしてやら

しやるは嚴ひ邪見、悪い事は言ふまい此方の仲間へ這入らしやれ、小女郎も此方

に添わせ、五十貫や百貫目の金は取替へて、親御の息が掛らずとも物の見事に取

立ませよ、仲間が多ふ成程此方は損なれど、運を力にする商賣運弱ふては埒明ぬ、

○命冥加 神佛の冥々の加護によつて不思議に命の助かること。

○みやいごし 「るあひごし」(居合腰)の詔。居ながら手早く太刀を抜いて敵をわたりあふ身がまへ。

○切掛けんず 切掛けんとする。

○手詰 責め寄せられて押詰ること。

○駕籠に乗る人駕籠昇く人 世にはさまさまの人があるをいふ意の語。

○女房にしなと殺しなと 女房にするなりと、或は殺すなりと。

○濡れて破る 鼻紙の濡れて破れると、盲目愛の爲に身の破滅なるを、いひかけた秀句である。

○毛刺の言葉の柔かな威嚇よりも、愛人の勧めに言葉の方が、惣七の心を遙かに強く動かしたのである。誠に情慾は制し極まねばならぬに、それが仕難いのは戀の道である。

○血酒飲む 酒の中に鮮血をたらして飲む。血を飲(み)すつて脛を結ぶと同じ。

○腕引いて 腕に刀を引いての感。腕を切り血を出して酒にたらすをいふ。

○見えました 眞實な心が見えました。

○嘘ましい 面倒な。既出

此中の様な場を遁れた命冥加な運強い此方、九右衛門が力に成人と見てコレ手を

下げる、仲間へ入て下され」と詞は下げても居合腰、否と言はぶ切掛けんづ氣色

面に見へ透いたり、惣七も手詰の返事仲間へ入れれば家の大事命の仇、否と言へば

小女郎を、人手に渡すのみならず命迄取らるゝ、何れの道にも死ぬる命國法をや

慎むべき、小女郎にや添ふべきと、二つの心身一つに定め、かねてぞ居たりける、

「申是惣七様、彼方の商賣は知らぬが、駕籠に乗る人駕籠昇人、品は變れど行道

は同じ事、金も取替へ何から何迄世話焼かふとの心入、お身に悪い事でもなし、

あつと言ふて仲間に成、早う私と起臥を一處にしようとは思さぬか、お爲になら

ぬ筋ならば否と返事を言ひ切らしやんせ、此方さんに添はれねば生て居る小女郎

じやない、女房にしなと殺しなと、否か應かゞ生死の、大事の返事で御座んする、

急ぐ事は無いぞや」と懐に手を差入れ、此汗はい」と鼻紙有たけ拭き捨る、

濡れて破るゝ人の身の、嗜み難き道ぞかし、惣七はつと打領き、得心致た只今よ

り仲間に成御指圖は背くまい、承り及ぶ長崎には物の堅めに血酒飲とや、偽

でない惣七が心底、腕引て誓を見せん」と、片肌脱げば「ア、見えましたく、

合計千五百兩である。そして揚屋と客との兩方をいひかく。又九右衛門と惣七との兩方もいひかく。

○おんらが在所はの：栗の木の この唄は俗謡「て、うちは子供の子ヨツチヨツ、でんぐりはかいぐり、かいぐりなり」の改作であらう。「おんらは「おれら、俺等」の訛。「て、うち」は「て、うち栗」の略。「て、うち栗」は「ておち栗」(出落栗)の訛で、丹波の大栗をいふ。

○此小女郎戀する：品者で南無阿彌陀佛 この小女郎を戀する山家の者どもが、小女郎が美人であるので浮かれる意であらう。「山家のといへるは、前に「おんらが在所はの奥山」といへるを受けたのである。

○品者 美人をいふ。現今でも美人を別品(べつびん)といふ。「南無阿彌陀佛」といへるは、これがてんがう念佛(ごんぶつ)心中(しんちゆう)の綱(つな)にもあるの唄であるからである。

○あやめ 「危め」である。危害を加へ。殺し。

○捕手 十手や棒をつかひ、人を痛めずに捕へる者をいふ。

○隠蓑・隠笠 著れば身を隠すといふ蓑及び笠等。「拾遺集」雑賀郡の歌に、「隠蓑隠笠をも得てしが、來りし人に知られざるべく」。「保元物語」爲朝卿が島渡りの條に「汝等は鬼の子孫か、さん候、さては聞ゆる實あらは取らせよ、見んま宣へば、昔正しく鬼神なりし時は、隠蓑隠笠皆隠れなごいふ實あり」かたづ。○固唾を呑む 唾を口のために、氣を凝らして一心になる。

人にこそよれ何の此方に偽有ふ、改て杯事皆來い〜」と呼集め、小女郎殿嬉しかろ、亭主身請の惣代金何程ぞ、「書附是に」と差出す、押取てさらりと讀、  
「小女郎殿共七人の、身請代金千四百五十兩な、端錢が有て喧ましい五十兩は亭主に遣る、千五百兩は受取れ」と、一兩二兩の七百五十兩方目出度い仲間入、皆兄弟より他事なふ爲され歌へ〜、己らが在所はの、奥山ので、うちのでんぐりでんぐり栗の木の、木の根を枕に轉び寝、此小女郎戀する山家の、品者で南無阿彌陀佛帶解いて是、御座れ抱いて轉び寝、面白そ」と樂しみける、町の夜番あはたた敷、人をあやめ法を背いた料人が、此廓へ入込たと上の町から客改、一人も客衆外へ出る事成ませぬ、捕手の衆が早爰へ」と言捨て、亭主を連れて駈出る、動せぬ自慢の九右衛門始め、六七人がぐんにやり〜、俄に顔色茹菜の様にしほしほと、「コリヤ堪らぬ、どうぞ船へ行道は外にないか、金の出るには構はぬ、土の底へは這入られず、天へ昇る梯子は無いか、隠蓑隠笠があら欲しや」と、我身一つを片附かねて震ひ居る、惣七小女郎が手を取て、門口に氣を配り固唾を呑んで居る所に、内か隣かぐはた〜〜と捕つた〜と喚く聲「なふ悲しや」

○殿町 この町名今なし。

○代官所 江戸時代では、幕府直轄又は藩主の支配下の年貢・公事・人別等を管理する地方官を代官といひ、その役所を代官所と稱した。

○溜息ほつとついだる 息を凝してゐたのが、大息をほつと續いで安心する。「ついたるは、息繼をしたる。近松作「冥途の飛脚」下之巻に、「まづ嬉しと、息を繼いたる所に。」

○世並の悪い疱瘡 「和漢三才圖會卷十、痘瘡の條に痘瘡の病狀を述べて、「熱毒はとほり三日、出齊でそろひ三日、廻變みよもる三日、異體をまあける三日、收斂させる三日」とある。痘症の經過かくの如くならず、悪くなるをいふ。

○二番湯かける 痘瘡を收斂させしめる爲に湯をかり、一度で效果なくて、二度かけるをいふ。この文は、醜い瘡面に驗へていふたのである。

○ぞぞ榮 ぞつと身の毛よたつて恐しく思ふこと。素心。「ぞぞは「さむく」素々の種であらう。

○お手柄 七人一度に身請とは、前代未聞のお手柄。

と一同に、腰を抜かして魂の身に添ふたるは無かりける、亭主四郎左立歸り

「ア、氣遣ひない、此博多の殿町で、飛脚殺して金取た奴、壁隣の揚屋で捕

へ、代官所へ引ました、此方の事では無い」と云へば一度に顔を見合ふア、

有難いヤレ、忝い、あつたら肝を潰した」と溜息ほつとついだるは、世並の悪い疱

瘡に二番湯かけし如くなり、長居は無益忽七殿、京へ上ろサア、皆々去なふ去

なふ、女郎衆は駕籠で船場迄、一口言ふても八人が「亭主さらば」と立出る、七

人一度に身請とは、聞も及ぬ大々盡、お獨一人顔に書附貼附たい、「ナフ、傑と

聞もぞぞがみ嫌や」と、「お手柄のお名が顯れう」、「顯れるは猶氣懸り、何にも

言ふな」と出て行、男自慢は七人の鼻に、顯れ

○鼻に顯はれ 鼻高い意に、後に密貿易者が鼻そぎの刑に處されるをきかせてかきうた。「顯はれは、顯はれたり」など

○三重 (既出) いふを、三重の爲に略したのである。

中之卷 (京都心清町 惣七の住宅)

登場人物の主なる者

惣左衛門(惣七の父。山科居住) 菱屋嘉右衛門(惣七の家主)  
小女郎 (もと博多柳町奥田) 惣七の召使等  
毛刺九右衛門(長崎生れ。密貿易者の首領) 小町屋惣七(もと京商人。密貿易者)  
毛刺九右衛門(毛刺九右衛門の配下) 老妻(惣七宅の留守番)

## 梗概

小町屋惣七の父惣左衛門は、山科に侘住居してゐるが、惣七が京都心清町に住んで、不義な富をなしてゐる噂を聞いて氣遣ひ、惣七の居宅を尋ねた。折節惣七夫婦は、大阪に行つて留守中であつたが、其の豪華な生活を見て驚き、これは噂の通りであると察し、惣七の家財を取出して、競賣にしてみました。惣七の家主菱屋嘉右衛門は、其の騒ぎを聞き、駈附けて惣左衛門を詰る。惣左衛門乃ち、家主に挨拶せず、事情も語らなかつた越度を陳謝して、我が子の不心得を語り、家主に連れられて隣家の町會所へ行つた。

惣七は小女郎と共に旅行先から歸り、我が家が空家となつて貸家札が貼つてあるを見て驚愕した。さては密貿易が發覺して、其の筋から手が廻つたのかと思ひ、召使の三人に所持金を與へて暇を遣る。この時、惣七が留守居を頼んでゐた老婆が町會所から歸り、涙にくれて惣七の留守中の出来事を知らせる。惣七は涙に眼を曇らせながら、「これ老婆、懸視に入れて置いた割符の形はどうなつたか。これが人手に渡れば一大事ぢや」。老婆「いや、懸視は賣つてしまはれたが、其の割符は殘して親父様の鼻紙入に納めてぢや。そんな事を氣遣ひなさらないで、早うお逃げなされませ。ハア町會所から呼びに来たさうな。もう往きまする」と、暇を告げて別れた。惣七は茫然として、「親父の耳に入るからは、世上に知れたに極まつた。四日市には知人もある。伊勢路へ向けて遁れられるだけ遁れよう」とて、支度に取りかかる。

其の際、毛刺九右衛門が突然訪ひ來り、惣七の狼狽するを見、訝つて之を詰り、「仲間中から預けた鳥の割符を返せ」と迫る。惣七「其の割符は大事にかけ、箱に入れて封を附け親父に預けた。追附けこれから持たせて遣らう」。毛刺色を變へ、「嘘をいふ

な。仲間を脱けて一人傭しよう工みぢやな。空家にして立退かうとは、其の手はくはぬ。割符は肌はだに附けてゐるだらう。受取つて見せう」と、潜戸くもり戸に懸金をかけて、どつかと上る。小女郎あわて、「これ九右衛門様、何の嘘うそがござんしよ。其の割符は二三日の中に私わしがきつと渡しましよ。まづ歸つて下さんせ」と押出す。其の手を毛刺けい擱おんで投飛ばし、惣七と互に切り結ぶ。小女郎は必死になつて止めにかかる。親は隣家に居てこの騒ぎを聞いて驚き、隣の壁かべを破り割符を出して見せる。惣七「ヤア九右衛門粗忽こつすな。割符を渡すから待て」と、親の手を戴いだいて割符を取り、「さあ受取れ」と渡す。毛刺は顔色を柔ならけ、「ムム慥たしかに受取つた。さて惣七我等は互に命いのちがけの身過ぢや。魂たましひを磨ひく仲間の作法、切り結んだ劔つるぎの下から陸ちまじうなるも魂、遺恨は残らぬ。見れば氣苦勞きくろうな顔色ぢや。大膽だいだんでないといこの商賣は出来ぬ。いつもの時分に又下りや、國で逢はう」と、別れを告げて去る。

惣七は倒れてゐる小女郎を介抱かいほうし、惣左衛門が隣の壁穴かべあなから、茶碗ちawanに汲くんで差入れた温湯ぬるまじを、小女郎と共に感謝かんしゃして飲む。親は又銀財布かぎさいふを投入れて、早う逃げよと言はぬばかりに、門の方を指して手を引入れた。惣七夫婦は泣く泣く門口かどぐちに出て老婆お婆に逢ふ。惣七「ヤレ老婆お婆、ただ一目小女郎に親父様おやぢさまを見せてくれ。路銀ろぎんのお禮れいも申したい」。惣左衛門之を聞き、「こりや老婆何をとほとほ呼びに来る。今の財布は隣の道具たがひを賣つた銀かぎを投込んだのぢや。禮れいを受ける筈はずがない。不義ふぎの富とみは浮雲うきぐもの如く、天あまの網あみは遁のがれ難い。誰の子かは知らねども、行末ゆきす末を思へば不便ふびんさに腹はらが立つわい。親は我が子が正しい道みちを守つて、あさましい死しをせぬやうに命いのちを全いうして、親の葬禮まうらひに喪服もくふくを着て供ともしてくれと祈いのるぞや。早う失せう」とばかりにて、わつと泣入る。惣七夫婦も胸塞むねさがり、涙なみだに袖そでをしほりつつ、しをくとして出でて行く。

評

惣七は愛人小女郎と共に、京都心清町で一時裕福ゆうふくな生活を営いんだ。然し不義ふぎの富とみは忽とち顛落てんらくし、毛刺けいとの恐ろしい切合きあひひから遁のがれたが、彼が犯した罪惡ざいごは、早晚さうばん遂ついに身を滅めぼすを遁のがれ得ないものである。

親子舅嫁おやこぢいめが惜別せきべつの涙なみだにくれる場ばは、前作の「冥途めいとの飛脚へいきゃく」新口村しんぐちむらの親子別れの場ばから脱化だつくわした趣向しゆきやうであるが、意匠いしやうに於て不自



然な嫌ひがあつて、前者よりも劣る。

○崩賣 片端から一つづつ賣立てること。

○椀家具 膳部の道具。膳椀の類。「日本水代藏」卷二、舟人馬方燈屋の庭の條に、「香華行料理人、椀家具の部屋を預り」。

○狩野 畫師狩野氏。

○百貫に編笠 不約合の喩にいふ語に「百貫の質かた」に編笠一蓋といふ。この文は、表具むけでも百貫を要したをこの語にいひかけ、同じく不約合の喩にいふ「提灯に釣鐘」の語をふまへて提灯につづけた。

○南京のはち奴 南京の鉢を八奴にいひかく。支那南京燒の鉢は高價な物なれど、八奴九奴の拍賣にするのである。

○鏢 つづしと同じ頭音語つはにつづけた。

○中脇差 申形の脇差。

○にやん奴 猫の聲にやんに「何奴」をいひかく。

○飛んで時鳥守本尊懸硯 雜賣の値段の飛上るを、「飛んで時鳥」といひかけ、時鳥の鳴聲「ぼぞんかたかぞ、守本尊と懸硯(懸子のある硯箱)とにいひかく。

○口々に付けて 鑓鑿を口々につけるを、口口に値段をつけるにいひかく。

○狼藉 狼の草を藉し「いて臥した跡の紛亂してゐる事」をいふ。よつて亂れがはしいこと、亂暴の意。

### 中之巻

市立て、屋財家財の崩賣・捨賣に相場なし、戸棚・箆筒・塗長持・燭臺・椀

家具・吸物椀、粗板・佛壇何や狩野の三幅對、表具ばかりも百貫に編笠・提灯、

南京の八奴から九奴を、鏢に見込の中脇差、鍋も釜も煤り鑪子も、疊も上て粗道

具、簀の子の竹の細道具、有とある物塵も灰も、猫も直打にやん奴、五分と飛ん

で時鳥、守本尊・懸硯、お齒黒壺も罷出て、金になれとや口々に附て糶るく糶

市に、町内騒ぎ喧しし、家主菱屋嘉右衛門興醒め顔にて駈け來り、是はく狼藉

千萬何事じや、此家は我等が貸家、主は小町屋惣七といふ、西國商人、夫婦連れ

で十日ばかりの逗留で大坂へ下る、跡には彼の婆たつた一人、留守の事はお家主頼

ますと言ひ置、今日か明日は戻られふ、老婆も老婆、留守居とは何の爲是親父、先和

にいふ。

○和御料 我御料の義。對稱代名詞。そなた。惣左衛門をさす。「御料は御料人の略。貴人の子息、息女の敬稱に用ひる。又

他人の妻の敬稱にもいふ。和御料「わごり」とは、男女に遇じての敬稱。「徳訓栞」に「料」を解して、「古へ何かねと稱する如く、其稱けの意なるにや」とある。

○町所 町會所。町年寄が集つて町内の事務を取扱ふ所。

○捌 理非の裁斷。

○心清町 京都市上京區上七軒にある西方寺を中心にして、其の東西に下「さがし」眞盛「しんせい」の獅子をいふ。「波陽名所集」(萬治二年刊)卷九に「西方寺」此寺は北野の北なる島井より一町東南かはにあり昔しんせいと云比丘尼此寺に住みしゆ丞俗にしんせいといふ。後輩かはり「金佛結天す申す也」とある。現今の處に發する眞盛豆の稱に、昔の名殘を留む。

○東ね 取締り。  
○年寄 町年寄の略。町内の公用雜務を掌る役である。町内の町人中で徳望あり資産ある者を公選し、總年寄が之を任命する。任期は多くは三年で、名譽職である。

○山科 京都市東山區山科町。  
○古郷力に 本曲上之卷に「親惣左衛門吟味強く、京大阪では總ひらな我が物で我が優らなず」「親御の息が掛からずさも」とある。惣七は、海賊に狙みせぬ以前は親がかりで、親から資金を受け監督されて、古郷の親を力に西國通ひの兩賣をしてゐた。

○端々 惣七が近況の端々で、即ち後に書いてある其の略をさす。  
○風體は無人の暮し 外見は人すくなくで淋しい世帯。

○内證の榮耀は千貫目持ち うちのの榮耀は長者ぐらし。西鶴撰の「日本水代藏」卷一、初午は乗つて来る仕合の條に、銀五百貫目よりしてこれを

幕つて来る仕合の條に、銀五百貫目よりしてこれを

御料は誰なれば、よい年をして京の町の作法知らぬか、町所へも斷無く、人の留守に踏込み疊迄賣拂ひ、捌は何とする事、此心清町一町の束ねをする年寄、即家主うつかりと見て居よか、老婆も一處に詮議する隣が町の會所、サー、歩びや」と喚げども、老婆は涙に顔傾け親惣左衛門手を束ね、「お家主と申お年寄御尤く、我等は惣七めが父、小町屋惣左衛門と申て生國は長崎、二十ヶ年此方上方居住致せども、資本なければ商賣も抄取らず、山科邊に逼塞致し、古郷力に惣七めが西國通ひ致せども、仕合したとの便もなく、どうか斯うかと思ひ暮す折節、端々人の取沙汰小町屋の惣七は、西國で大きに儲け、博多の傾城請出し、心清町に檜の木作節無ししの店を張り、風體は無人の暮でも、内證の榮耀は千貫目持と、噂する程心得難く、夜前始て尋参り沙汰に違はぬ内の諸道具、代物に吃驚致し、老婆めにむかふても委しき様子は知らぬと申、各々も商人我等も七十八迄商で食べた者、胴返の利なればとて儲けるには方圖がある、僅か十兩十五兩儲けてさへ吹聴して悦させた正直孝行な惣七め、一人の親に隠すからはろくな銀とは存せぬ、後に幕つてお町内お家主へも難儀をかけ、其身も人並の死をせぬ奴、今斯う致すも親

分限といへり、千貫目の上を長者とは云ふなり。銀六十匁を金一兩替として、銀千貫目は金一兩六千六百六十六兩餘に當る。

○夜前 昨夜。

○むかうても 向つて尋ねても。

○胴返の利 資金と同額の利益を「胴返」はもと胴返の謂。

○方圖 際限。きまり。もと藩國引きから出た語。

○ふいちやう 言ひひろめること。「倭訓栞」に「ふいちやう」國語に風聽懸言於市と見えたりとある。「吹聴」とも書く。

○ろく 正または平の義。正しいこと。正圓を「ろく」といひ、陸地を「ろく」といふ。「ろく」もこれである。

○憂き沙踏んで 辛苦を體驗して。憂い辛い目に遭つて。「ひぢりめん卯月紅葉」に「江戸長崎へも逐下し、しほを踏ませて人にしや」。

○きんか頭 禿頭。「きんか」は「きんかん」ともいひ、きら／＼光る體をいふ語。金指頭と書くは當字である。

○口合家請 惣七口を合はせて申込んだ人、また家の請人に立つた人、即ち保證人。

○老婆も判を取る 老婆「うは」も判を捺してくれ。

○天の岩戸 天照大神が素戔嗚尊の横暴を憤り給ひ、一時天の石屋に閉籠り給うた話は、「古事記」上卷神代の條にも見え、天石戸「あ

博多小女郎波枕

の慈悲、邪の銀は身につかぬと申事、骨身に染みて思ひ知らせ、憂き沙踏んで

正道の商に取付心付けん爲、俄に道具屋へ走やら古鐵買を呼やら、心急いてお

町内へ無禮、お家主へ附届申さぬは、眞平へ幾重にもお詫言、貸家札出して下

されませ、お家は明ます明ます」ばかりにて、下ぐるはきんか頭なり、御親父の

言分承 届けたさりながら、惣七殿には口合家請も有仁、後日の念に御親父の

一札、留守居の老婆も判を取、サア會所へ同道いざござれ」と門の戸はたと引立

て、天の岩戸にあらねども爰にも紙の貸屋札、残らぬ千早古道具明家とこそ成

にけれ、博多小女郎は、町風に、馴れし夫の惣七が、あぶなき分限波の上何百里

とも知らぬ火の心算紫を過し身は、京大坂は隣にて夫婦打連れ歸りしが、暖簾外

し大戸を締めて、墨黒に貸屋札「こりやどうじや、ハツ／＼」と云ふより詞なく、

潜戸押明入たるに湯水を飲まん鍋釜も、疊も上げて閑子鳥、泣にも泣かれず興醒

まのいはやじの糞と稱して有名である。それとは違へる爰にも、同じ「神」の音の「紙」の貸家札を貼つて戸を閉げた家。

○千早ふる道具 千早振に古道具をいひかく。「千早」は「いちばや」(逸早)の義。「ふる」は「び」の延音で形容の語なれば、荒ぶるの意である。強い勢の縁によつて神なごの枕詞とする。この文は、紙を神にいひかけ、其の枕詞を用ひた文飾である。そして残らず古道具を賣飛ばした意。

○閑子鳥 郭公鳥のことで、「かつほうざり」ともいふ。「儘言葉覽」に、「かんこ鳥の啼やう。カンコ鳥の聲は淋しきものなれば喧へいふなり」。この文は、疊もあけて人住まぬ閑寂なるを、閑子鳥鳴くさうて、鳴くを泣くといひかけた。

○大戸 表口などにある大きな戸。

○知らぬ火 海神變として何百里とも知らぬを、筑紫の枕詞なる「知らぬ火」にいひかく。詳しくは「國性番合戦」千里が竹のところに述べた。

○足の裏の疵に應ゆる小笹原 蓋に「すねに疵持ては笹原が歩かれぬ」こいふに據つたのである。身に後暗い事ある者は、風に囁る笹原の音にも心懸してたじろくこの意。

○内儀 人の妻を呼ぶ稱。内方。

○三吉下駄 上方で流行の下駄であつたのであらう。但し大阪に三吉といふ下駄屋があつたものか、また如何なる形の下駄か、詳でない。

○譯の悪い、こゝわけの悪い。すぢみちの立たぬ。不都合な。

○詰開く 是非を亂し理窟をいふ。談判する。「色道大鏡 卷一」に「詰開く兵法より出でたる詞なり、愛にいふは物の差配こゝわりの是非を亂し、道理を惑す詞也」。

○女子の言うて濟まぬ事 女子さうしが話し合つたのでは、事件は解決せぬ。

○普請 宋音。もこ佛家で普く同志を請來して、共に事を爲すをいひ、轉じて工事をいふ。建築。

○根太 ゆかの下に互し横木。ここは根太の上に張る板をいうたのである。

○町義附合 町内の義理交際。

○おろか おろそか。疎略。

○どうでも 何とんでも。そのみち。

○何れの道でも命ある中 何であらうも、捕縛されて命を取られぬ中に、逃れ仕度をせねばならぬ。

○金更紗 金泥で彩色した更紗。「更紗」は音借

め果て口を、明いたるばかりなり、惣七心は足の裏の疵に應ゆる小笹原、實の子にどうと坐しければ、小女郎急いで「是申、緩りとして居さんす所有まい、懇にする家主殿、内儀様と私とも親しうて、先度下る時にも、土産に大坂の三吉下駄頼むぞやとおしやんした、それ程他事ない中で譯の悪い仕方、私やきつと詰開かふ」と、走出るを「是々々々、女子の言ふて濟まぬ事貸家といふは名ばかり、破れ家を手前普請根太も追附張る筈で、板も買置、家賃と云へば二ヶ月三か月先へは遣れど滞らず、町義附合おろかもなき身、家財迄取られ老婆が行方も知れぬは、どうでも下の沙汰でなし、方々に預置し金銀荷物についての事か、何れの道でも命有中一夜も爰では明されず、エ、是非に及ぬ惣七が運も是迄、こりや女子共男共、見る通の仕合力に叶はぬ、主従の縁も是限り、大坂の遣ひ餘り一步細金少々有、三人寄て分て取れ暇を遣る、さらば」金更紗の財布共に投出せば、

「お笑止共何ともお辭儀申もお慮外、又の御縁」と口上を、捻つて見れば手に觸る、一步小判も八九兩、はつと寐耳に水臭き、半季一季の名残なく連れ立、表に出にけり、物音隣へ聞ゆれば老婆が會所を抜けて来て「なふ疎ましや、昨日

字であつて、西洋の貿易商人から我が國人に傳はつた語である。「冥途の飛脚」の「更紗袴」の條を見よ。

○笑止 氣の毒。いたはしいこと。蓋し笑止は當字であつて、も「勝事」であらう。そして尋常ならぬ意から、興のさめること、いたはしいことの意に轉じたのであらう。

○慮外 無禮。

○寐耳に水臭き 「寐耳に水」の語を「水臭き」につづけた。不意に大金を貰つたことに驚き、召使はれた情薄く直ちに去る意。

○水臭き 交情薄き。「保調菜」に「みづくさし」淡しき道に云り、水臭き意味より氣味に轉じいふは隨らしきの反也。下の「名残なく」に應じる。

○半季一季の名残 名残を惜んで半季(半年)一季(一年)のお禮奉公。

○會所 前文に「隣が町の會所、サア／＼歩」あよしびや」とある。

○おとましましや うごまし「確」の標。確はしや。うらさや。

○中々でも無い事 さやうでも無いこと。肯定できない事をいうたごの意。狂言體靜に「歌などにも標とは詠まれたれども、花とは詠まれませぬ。アなかり、でもない」ことをいひをる、其歌を詠んで聞かせい。

○木の空に引張らるる 際利はりつけに處せられる。

○いとしばや 「いとしばしや」の倒さ語。いたは

の晩から親父様がお出なされ、中々でも無い事、淺ましい欲心に海賊の仲間に入、

道に違ふた銀儲けを結構な事と思ひ居る、木の空に引張らるゝは今の事、榮大根

肩に置ても、正道な儲けは三文でも、身に附と言ひ聞せた詞反古にして、何で出

来た屋財家財、是が我子の敵じやと、おいとしばや涙片手に道具屋集め、二足三

文に賣捨家もあげて其上に、隣の會所で町衆の前に、畏、何やら斷言ふたり、

皆お前故の御苦勞」と、涙ぐめば涙ぐみ、これ老婆懸視に入置し割符の手形、是

があれば一大事、入物共に道具屋の手へ渡つたか、「否々懸視は賣れたれども、

其割符は残して親父様の鼻紙入に納てじや、そんな事氣遣せず早う町をのけまし

たい、ハア會所から呼そうな老婆はもう往きまする、命あらば御縁次第お二人共

に御無事でや」と歸るぞ是も名殘成、茫然として惣七、親父の耳へ入からは、世

上に知れたに極つた、四日市には思ひ寄方もある、伊勢路へ向けて遁る、たけは遁

しや。

○二足三文 捨賣の意にふ陸。もと金剛草鞋の價より出

た詞であつて、高價な品も草鞋の價程に安く賣捨てる意。

○あけて 家主に上げて、即ち家主に引渡して。

○涙ぐめば涙ぐみ 老婆が涙ぐめば惣七も涙ぐみ。

○割符の手形 本曲上之巻に「此一通は來夏船の割符、逆

ひ船にお出なされとの言傳」とある。

○のけましたい 逃がし申したい。「のける」は取のける意。

○でや 死ぬて下されよ。

○四日市 伊勢國四日市市。

○七つ 午後四時。

○思うて 思うごごつた。

○と ミ案内し。

○胡散 疑ひ怪しむこと。蓋し支那小説に「胡散」  
とある語が常用語となつて、廣東若を傳へたの  
であらう。

○しだら 「しだらうつ」の「しだら」であらう。

ほび拍子の義から轉じて、工合、都合、體たらくの  
意をなす。

○窄む 縮小する。ここの文は鬚子別居してゐる  
を一所帯に縮小するのである。

○商賣時分 木曲上之巻に「此一週は來夏船の  
割符、迎ひ船にお出なされ」とあるから、これは夏  
の頃である。

○嶋の割符 支那方面の何處であるか知れぬが  
も、毛刺等が取引する海賊等が、根據としてゐる嶋  
の一通の割符。

○どこへ旨い事言ふな どこへ左様な事が  
ある、甘言人を欺くな。

○其肌 汝の肌。

○櫃 戸の上下の棧に裝置し、鴨居と敷居に挿す  
機であつて、戸じまりの具。おとし。さる。「ひび  
りめん卯月紅裝」に「倉の戸を開けて内にそつと入  
り、くぐるをばたさ落しける」。

○魚と水 極めて親密な間柄。「三國志 諸葛亮  
傳」に「孤之有孔明、猶魚之有水也」。

○反を打つて 刀を抜き放さうとして、右手に

れて見ん、もう七つに下つた、サア用意」といふ所に「惣七宿にか、早い門の鎖

し様」と、潜戸を明てつゝと入は毛剃九右衛門、惣七うろたへ、ヤ珍しい何と思

ふて、先々是へ」と「煙草盆持て來い、茶持て來いよ」といふ程九右衛門胡散顔、

「黙りや〜惣七、大坂で逢ふたは四五日前、追附上る京で逢はふと言合せ、こ

りや宿替と見へた、何としたしだらで何方へ立退きやる、氣遣なり」と言ひけれ

ば、「イヤ〜氣遣な事でない、たつた今上つてまだ洗足もつかはず、老體の親別

住居も異な物と、一處に窄む談合で諸道具を引やら、取込んだ最中、旅宿は何處

ぞ其中此方から便宜せう、休んで往きや」と出んとす「待ちや〜、ハテきよろ

きよろと女夫ながら吞込まぬ素振、是やがて商賣時分、此方も明日國へ下る、仲間

中から預、嶋の割符受取に來た、其割符を渡して往きや、「ヲ、如何にも〜

其割符は大事にかけ、箱に入封を附親父に預た、追附是から持せて遣らふ」と、

いふより九右衛門色を變へ、三千里を股にかける此仲間、命換の割符を親父に預

けたとは、どこへ旨い事言ふな〜、仲間を脱けて一人儲けしようでな、音沙汰

なしの俄宿替と、丁度算盤が合ふた、此割符は其肌はだに附つて居る、知れた事、受

なしの俄宿替と、丁度算盤が合ふた、此割符は其肌はだに附つて居る、知れた事、受

柄を握り、左手に柄のそりをかへして。

○細目も弱き古簀子 相共に密貿易の罪惡を犯してゐる身であるによつて、何時捕縛されて細目の恥を受けるたうかミ、良心の呵責を受けて心塵し、氣も弱つて手元の狂ふを、細目も朽ちて弱くなる古簀子にいわひかく。

○まばら 間敷の義。「まばら朽ちたる」とは、あちらこちら所々朽ちてゐるをいふ。

○しのべ竹 「しのめ竹」又は「めだけ」ともいひ、節と節との間の長い竹である。「嬉遊笑覧」に「しのべは節延なるべし、江戸などにはしの竹も略呼す」。

○がぶり 振上げた刀を打おろすさまをいふ副詞。ほつさり。この文は、甲が右へ拂へば乙は左へがぶりと打おろし、互に打合ふのである。

○切先 刀の端の尖三寸は切先三寸といひ、最もよく切れるところ。

○春の日に解け行く氷踏む 其の陥るを畏る。以て憂危の至の意にいふ。「春經」周書「君牙痛に、「心之憂危、若蹈虎尾、涉于春冰」。

○鐵箒 鐵製のこまざらひ(細把)をいひ、塵芥を掃除する具。「好色産毛」に、「鐵箒持て門掃ぎ」。

○しがらみて からみつけて。

○中の楯 惣七ミ九右衛門ミの間の楯として隔てる。

○前に塞がり後に開き 小女郎は障子を楯として前に塞がれば、毛刺は障子越しに切らうとするので、小女郎は後退りする意。「開き」は退きの義。

○踏みためず 小女郎は躊躇めて身を支へることができず。

取て見せう」と、大戸潜りの懸金櫃、しつかと締めて伸上がれば、小女郎慌て

「これ九右衛門様、魚と水とのお仲間何の嘘がござんしよ、此割符は二三日中私

が屹度渡しましよ、先歸つて下さんせ」と、押出す小腕むすと取、「エ、面倒な

と簀子にどうと投附くる、卑怯な女を痛めずとも、言ふ事は身に言へ」と脇差に

手をかくれば、ヤ反を打て嚇しても割符を取らずに置かふか」と、すはと拔けば

惣七も飛退つて抜き合せ、兩方腕は狂はねども細目も弱き古簀子、まばら朽ちた

るしのべ竹、踏込む足を踏止めて、右へ拂へば左へがぶり、左を切れば右を踏込、

打合ふ切先春の日に解け行く氷踏む如く、小女郎は中に身を捨る掃溜の鐵箒、持

て開いて相手の刃物打落さんと立廻る、裾を簀子に柵みて、かつぱと轉ぶ頭の上

閃く刃ぞ 危けれ、四邊隣に聞附ても恐れてわざと知らぬ顔、堪りかねて惣左衛門

何をいふも子の可愛さ、「割符を渡す怪我すな」と、表へ廻り門の戸を、推せど敲

けど明かにこそ、櫃の穴から覗いては「ハア、く悲しや危や」と、腕いて裏へ

駈廻る、内には小女郎障子を外し中の楯、相手の刃物を押へんと前に塞がり後に

開き、隙間を見て打附くる、足踏みためず障子を我身に負ながら、どうと伏せば

○あこがれ 在處難、ありかかろこの略奪か。魂が身を離れる程、夢川になり。心落ちつかず。

○壁下地 竹木の細きを組みて壁を造る骨ミするものこまひ。

○手つきの物言ふばかり 手の様子はその親の心を口に語る如く明瞭に察せられる。

○聊爾 率爾。粗忽。

○差す 刀を鞘に差す。

○手共に取つて 親の手と共に割符を取つて。

○身過 なりほひ。生計。

○遺恨は残らぬ、氣苦勞のある顔色ぢや 九右衛門は怒る時には大いに怒れども、一方にまだ優しい心を見せる。惣七を仲間に入れる時、こゝも其の同じ心をおらはした。この性格あつてこそ、悪人なれどもさすが首魁の賞祿がある。

○野太し ぶぶさしい。ぶら／＼しい。

○湯でも 湯でも下され。

○あら氣の毒 「あらはこそしこいふべきを、」あら氣の毒にひびつづけた。「氣の毒」は、氣の藥の反對で、惣七の心の苦痛をいふ。

○冥加ない 恐縮の至り。恐多い。

九右衛門透さす懸くる片足を、がはと踏込み小女郎が上に重なり伏し、障子越しに突かんとす、突いたらおのれ一打」と、上に閃めく惣七が切先、危き中の危さなり、親はあこがれ隣の壁打毀ち、手の出る程に壁下地引破り、割符を出し閃かす親の手つきの物言ふばかり、惣七きつと見附、「ヤイ九右衛門聊爾すな、割符渡す言分有まい、此方も差す、サア差せ」と鞘に納めて眼前に、助かる命も親の慈悲と手共に取て押戴き、是々慥に受取れ」と、渡せばとつくと見届、ム別條ない受取た、是惣七、互に命がけの身過、魂を磨く仲間の法、切結んだ劍の下から陸じう成も魂、遺恨は残らぬ、氣苦勞の有顔色じや、山が崩れかゝつても、狼狽へぬ心持たねば此商賣はならぬ事、いつもの時分に又下りや、國で逢はふ」と暇乞ひ出て行こぞ野太けれ、惣七小女郎を引起し「今を見てか、忝い、親の慈悲此壁の、崩れをせめて拜みや」と泣ければ、ア、有難い御恩徳、慈悲心を受ながら、壁一重彼方の舅御の御面體、見る事も叶はぬか、ハア、息切れて物言はれぬ、水でも湯でも」と苦しめども、茶碗一つ杓一本「あら氣の毒何としよ」と、言ふ聲隣に響き入、茶碗に温湯壁越しに、情の親の手つきを見て、「ハア、冥



○機嫌 もこ、誤解であつて、そしりきらふ事の  
義より轉じて、人の好まぬこゝを窺ひ測ること。心  
もち。

○一期の見初め見納め （見納） 一生の見初めで、  
そしてそれはこれ限りで再び見られないこと。

○銀財布一つ 銀の人つてゐる財布一つ。

○是がほんの名残ぢや この財布が親から  
戴いた本當の名残の品ぢや。

○とぼく よろく。よろめくさまをいふ。  
近松作「冥途の飛脚」上之巻に「忠兵衛はとぼく、ミ、  
外の工面内の首尾」。

加ない有難い」と夫婦わつと泣出し、茶碗に縋り手に縋り、「お杯とも薬とも、  
氏神の御神酒とも、此上のあるべきか」と、二人戴き飲み交し、「申お手は取れど  
も顔は知らぬ、私はお許し無けれどお前の嫁、どうぞ御機嫌直して、惣七様と  
も詞を交し、一期の見初見納めに、お顔を拜ませ下され」と、舅の手を我顔に、  
押當て泣涙、親の歎きも現はれて腕震ふを哀れる、盡させぬ涙の手を振放  
し、銀財布一つ投出し、早う出て行け」と言はぬばかりに門の方、教ゆる手さ  
へ引入るれば、「今は親よ舅よと便る名残も切れたるか」と、又絶入て泣けるが、  
「ナフ不孝至極の惣七に、是程のお慈悲、路銀迄下さるゝお心背くは猶不孝」と、  
財布を女夫が戴き、「早人顔も見へまい是が本の名残じや」と、互に身用意裾  
引上げ泣く表に出けるが、隣の門を遙かに見入、老婆只一目親父様を、  
小女郎に見せてくれ、路銀のお禮も申たい」と小聲に言ふも聞附て、老婆が  
惣左衛門、「こりや老婆何をとぼくする今の銀は隣の道具賣つた銀、直に隣へ  
投込んだ、禮受る筈がない、惣左衛門が子供には商ひこそ教へたれ、非道の身過  
する子は持たぬ、淺ましや不便や天道も日月も、神も佛も罰は當てはなされねど、

○生身には餌食あり 生きてゐる身には、餌食がついてまはるゝの意の諺「元曲運」に「天不生無敵之人」

○三界の棄兒となり 現世に於て神佛の加護に見放された意。「三界とは欲界・色界・無色界をいふ。三界はいづれも有漏の迷界なれば、娑婆即ち現世の意に在る。「法華經 譬喻品の釋尊の詞に「今此三界皆是我有、其中衆生悉是我子」とある。棄兒となるは、神佛の加護から見放された意である。

○のたれ死 行倒れ。

○身の分量を知つたる故 其の身の程を知つたる故である。

○親を先に立て 親は子よりも先に死ぬが順當であるからかくいふ。

○行くこそ 「行くこそ我れなれしなむ」といふべきを、三重であるから略したのである。

○三重 この名稱も三聲明しやうみやうしから出た語で、三絃の調子の高い一種の廻き方である。人の聲音は三絃の三重の調子が出されぬので、三重に合はせて唄はれぬ爲に「詠らぬこもあれは、従つてその文句も略すことがある。

此方から罰の下へ當りに行くとは知らぬかや、生身には餌食有、人間一人生るれば、乳房といふ天道の御扶持方、正道の家職動むれば分限相應の、天の乳房が備はる、正道にない銀儲け、榮耀する様なれど天道の乳首に放れ、三界の棄兒となり、のたれ死するは幾人か、猫は火燵に寢臥する犬は土邊で物食へど、火燵な猫の眞似せぬは、身の分量を知つたる故、畜類に劣つた身の程知らず、成れの果を思はれ、不便さに腹が立わいや」と包み、かねたる涙なり、「ヤイ惣左衛門が子に成たくば、手鍋提ても正道に、淺ましい死をせぬ様に、命全ふ何卒親を先に立、惣左衛門が葬禮に喪服を着て供して見せ、其時は我子じやと、棺の中から悦ぶ、早ふ失せふ」とばかりにて、わつと泣入泣聲の耳に、残るを形見にて別れ、行くこそ

三三重

下 卷 (惣七小女郎道 行。河合村)

登場人物の主な者

梗概

小町屋惣七(もと京商人。海賊毛) 小女 郎(もと博多柳町奥田屋)  
非人等 公儀の役人 海賊等 海賊の馴染の傾城等 駕籠舁等 捕手の役人

小町屋惣七夫婦は、朝まだき住み馴れた我が宿を後に、伊勢路をさして逃げのびる。道すがら人目を忍んで三條小橋・粟田口を過ぎ、神の加護を祈りつつ鈴鹿山・坂下を通り、關の地蔵を伏し拜む。ここで小女郎と別々に駕籠に乗り、杖衝坂・小谷・大谷を打越えて追分に著く。

それより四日市に向ふ。其の途中の河合村で捕吏の包圍に遭ひ、惣七は乗つた駕籠ぐるみ細引網を打掛けられて、深く身を恥ぢ、念佛を唱へて自害する。駕籠舁が駕籠を昇上げれば、がばくと血が流れる。

其處へ引かれて来た繩附の小女郎は、流れてゐる血汐を踏みしだき、泣顔を惣七の駕籠の中に差入れ、「小女郎が来ました。私も今縛られました、繩にかりましたぞや。生きるも死ぬも共にと思つたに、私一人生き残つて悲しい目を見る事か。これ貴方さぞ苦しかろ、せつなうござらう」と、心も亂れてもがく。惣七は蟲の息をつぎながら、「お前も縛られたか」とて、感慨無量の涙を流し、「自分が海賊毛・刺九右衛門に與した爲に、親にも心配をかけ、罪も無いお前までも科人にした。どうぞ赦してくれ」と詫げる。捕吏も兩人の心を思ひ遣つて哀れを催し、「この儘に置いて兩方互に名残を惜ませよ」といふ。

小女郎は惣七の言葉を聞く程悲しく、「其の起りは誰がさせました。私を人手に渡すまいとお心から、親御に換へ又命に換へ、女房に持つて下された。それ程私を可愛がつて下さつた御恩は、生々々々忘れ申しませぬ。この手が自由になる事なら、拜んで死にたうござんす」と、夫の膝にもたれて泣入る。惣七「この世は今が限りなれども、來世も變らぬ女夫ぞよ」と、念佛の聲と共に、突込んでゐる脇差を抜くと直に息が絶えた。小女郎聲を上げ、「待つて下され、私も共に冥途に連立ちます。お役人様私を殺して下され」と、狂亂のやうに悶えたのは、哀れの極みであつた。

折から公儀の役人眞先に立ち、此處彼處で召捕つた海賊等を、遊女交りに繩を掛けて引き來る。公儀の役人は判決書を開き、「召人どもに申し聞かする趣有難く承れ。一、沖がかりの大船に通路を求め、波を潜り水底を抜け船へ近附き、財貨を奪ひ取りし事國法に背く大罪、武士に仰せて死罪たるべき所、皇室大禮の御悦びによつて大赦が行はれ、死罪一等を減ぜらる」と申し渡した。かくて海賊等は各々罪の輕重によつて、顔に燒鐵・入癩・耳殺ぎ・鼻殺ぎなどされて追拂はれた。

海賊・遊女等は蘇生の思ひして喜ぶ中に、小女郎一人は、惣七も長らへてゐたら死罪を免れたであらうと、思ふも辛く悲數は更に増した。小女郎も罪を赦されて、惣七の父に仕へ、亡夫の後世を弔ふこととなる。

この哀れな戀物語は、人々に知れ渡つて後世まで傳はつた。

## 評

惣七夫婦が愁に沈む道行の文は、其の人の罪を惡むよりも寧ろ其の哀れを思はせる。河合村で逮捕される場合は、眞に迫つてぞつとする。また惣七夫婦が死別の眞際に、相互に能く理解した眞實の言葉は、哀婉を極めて人情の琴線に觸れる。實に惣七と小女郎とは共に暮すを樂しみ、其の樂しみの一日も長からん事を希うた。そして早晚悲惨な運命に殉ぜねばならぬ事も、彼等が夫婦となる時から豫期し、且甘受したものであつた。

この夫婦愛を強調した近松の妙文は、この哀れな戀物語と共に、讀者の胸に永く残るであらう。

○一模様 同一の様子。相通じてゐる所がある

この意。小袖の縁で「模様」といふ。縁と小袖は、同じ頭音によつた、即ち頭韻法。

○見限り果てられて 戀が災ひの種となり、神佛や親に見限り果てられて。

○明けやらぬ 鎖して明けやらぬを、夜の明け

## 下卷 惣七小女郎道行

戀と、小袖は、一模様、身に、引締めて合ふてこそ、寢心もよく著心もよく、

やらぬにいひかく。

○深き 夜の深きに、親の恩の深きをいひかく。

○著たる 思を著たる、即ち思を受けたるをいひ、小袖の縁によつた語である。このあたりの文、小袖は有難いが、縁は遂に身をあやまる意を述べた。

○肩背苦しき 肩も背も苦し、程再緒する意。

○粟田口 遂に粟田口をいひかく。「粟田口」は京都三條通りの東端（今も白川橋東から阪上までをいふ）で、大津への通路である。昔の刑場は此道の右方で、面積百三十坪許の長方形の地であつた。この文は、粟田口の刑場に引かれるかと思ひしもの意であつて、粟田口を通ぎることをいうたのである。

○關寺に：今の小町屋 心の急ぐに關寺をいひかく。そして謡曲「關寺小町」に、小野小町が關寺のはざりに住みて、身の衰へたのを恥かしがつた事が見えてゐるに據つて、「今の小町屋」にいひつづけた。「關寺」は、昔時近江國滋賀郡達坂山にあつたが今は無く、大津市上關寺町にある安養寺（立開觀音）安置の阿闍陀如来は國寶で、もと關寺の本尊と傳ふ。この文は、關寺を通ぎ行くにつけ、小野小町の衰れな末路を述べて、以て今の小町屋の悲しい末路をきかせた妙筆である。

○馴竹 横にわたして衣服などを懸ける竿。衣架。「物類稱呼」巻四、器用部に「衣架」かげざは、俗稱、筑紫にてならしと云。この文意は、小町屋物比の衰れた末路は、博多小女郎がならしたを「ならし竹」

よく見限り果てられて追出されし我宿の、邊りに顔を見られじと、戸口も店

も明やらぬ星も、夜深き親の恩重ねて著たる其時は、いと心も輕かりし、今朝

肌薄く行道は、肩背苦しき、身の行方心からとは、云ひながら、情願染みの京の

町、三條小橋で知る人に粟田口かと思ひしも、先へ心の關寺に、身の衰への恥か

しき、今の小町屋惣七は、博多小女郎がならし竹いつも心に懸けて置、親の

きに綾錦、もはや都を見ん事も、又と成まい限り」と言へば、共に泣く、憂き

黒縹子の、糸の切れざるべんがら縞の、愚痴な更々をふでは無いに、羅紗も無い

事、言わしやりんすな、先へ行子に尋れば、拔參宮の頭字が耳に留まる神心、守

にいひかけ、「ならし竹」は衣服などを懸ける縁で、心に懸けて置、「と」いひつづけたのである。

○かいき 舶來の縞布の名。「和漢三才圖會」卷二十七、縞布類に「加伊岐」按、加伊岐出於阿闍陀、其縞上品有黃有赤有茶色、而舊淡者地厚、後淡者稍薄、本朝未綾之。これに「勸氣に連ふ」をいひかけて「綾錦」につづけた。

○限り これがこの世の見納め。

○糸の切れざる 縁の切れぬ意をいひかく。

○べんがら縞 縁を木綿絲、經を絹絲で織り、多くは立縞である。「和漢三才圖會」に「袴葛刺（べんがら）綉、按袴葛刺天竺國名、出於此綉、綿木綿、經絲似乎而脆、多純御條、たつし

まじ也」。

○羅紗 「らち」(辱)をきかせた。このあたりの文は、小町屋惣七が呉服商人である縁によつた織物遊しである。

○言はしやりんすな 言はしやりますな。これに紗縷子をいひかく。

○子に尋ねれば 子に道を尋ねれば、子は「拔參宮なまざるか」と問うたのである。

○拔參宮の頭字 「拔」である。そして拔荷商（御買物）をいふの「拔」同じであるによつて、氣懸りになるのである。「拔參宮」は「ぬけまるり」といひ、親や主人などに恥して、「こつそり」伊勢大神宮に參詣すること。

○鈴鹿山 伊勢・近江の國境にある横嶺。これを越えるのである。そして神樂の鈴にかけた。

○八十瀬の川 鈴鹿山には數多の谷川があつて、鈴鹿川の源をなせるによつていふ。

○冷泉 冷泉節をいひ、淨瑠璃節の一。(見索引)  
○坂下 伊勢國鈴鹿郡坂下村。鈴鹿峠の東方に當り、東海道五十三次の一。

○淺黄 情交淺きにいひかく。

○裏表もない心 かゆひなたなき眞實の心。偽紫 妻にはなれない者が妻となるを、ゆかりの色(紫)にいひかく。近松作「日本武尊昔姿鑑第二」冒頭の文に、「京小袖にせ紫の重ね妻ごある。これも日本武尊が筑紫の鼻師をたまし、嫁入姿になられたことをいうたのである。

○ならで ならでは妾の身をまかす人なしと。

○統 地合薄く光澤ある絹布の一種。「ゆめ」に「ゆめ」(夢)をまかせた。

○關のお地藏 伊勢國鈴鹿郡關宿(鈴鹿峠の要)九關山寶藏寺(通稱關の地藏院)の岩窟内にあつて、三尺七寸の木彫、禪定の坐像で、行基菩薩の作。ここの文は、「松の落葉(卷四)、馬子隨の唄に、關のお地藏は親よりましとや、親も定めぬ妻を持つよの、云々」とあるに據つた。

○優らぬ 關のお地藏に優らぬ。

○頼みをすぐに救ひ乗せ 地藏菩薩が衆生を濟度する意をまかせて、かくいうた。

○共に助かる 地藏菩薩に救はれて助かる。駕

り給へと再拜の、袖に神樂の鈴鹿山、八十瀬の川に濡れ初めし已と、其方が初戀に、二世も三世も變らじと上り、詰めたる、坂の下、今の零落の身と知らば、ざつと淺黄に染めふ物裏表もない、心から偽紫の色惡ふ、憔悴顔見る悲しやと絞る袂の涙の露野邊の草葉も色附ぬ、泣て心を亂せとか、方様ならで、頼む博多の小女郎がなくなれば、世帯の花も縮緬と、こんな姿にせまい物、統幻の此世から、未來も夫婦ごと、縋り附てぞ泣居たる、關の、お地藏は、親よりましと、聞なれど、優らぬ此世の舅御の、機嫌直して給はれと頼みを直に救ひ乗せ、共に助かる駕籠昇の、「駕籠遣りませふ」と歩み來る「尾張へ行者、先の宿迄駕籠賃幾許」

「石薬師迄は道は二里有駕籠賃ころり」「ころりは知らぬ」「知らずば錢百」「それは高い」「負けて行ましょ」「七十」「よいは負けた」と駕籠下す道は一筋駕籠二挺、二人思ひを抱載せて、打見るよりは肩重く「小川じや」「そこせい」「肩せい」「まつかせ」杖衝坂・小谷・大谷打過て日影も、我も行空の、未果でしなき、旅衣昨日今日とは思へども、都を出て日數さへ、四日市にも程近き追分、

にこそ 著にける

籠に乗れば、徒歩の勢を助かる。駕籠昇は駕籠賃を得て助かる。

○石薬師 伊勢國にあり、東海道五十三次の一、庄野と四日市との間。

○ころり 鎌倉文の符旗であつて、駕籠昇などのいふ語。

○そこせい 注意せよなどの意にいふ駕籠昇の掛聲。この文は、先肩・後肩が互に掛合ふ言葉である。

○まつかせ 「任せ」に促音の添加した語。承知した。(既出)

○杖衝坂 伊勢國三重郡内郡村にある山路。

○大谷 伊勢國員統郡御井村領南山の谷一里も連りて、これを大谷といふ。

○四日市 四日市市は伊勢海の西岸に位す。今は人口約六萬。石薬師と桑名との間にあつて、東海道五十三次の一。

○追分 伊勢國三重郡日本村の村邑で、東海道より参宮街道の分れる所であつて、四日市へ一里半。

○正しかれ 「正」まさしくあれの約。正確であれ。この文意は、辻占の逢はぬやうに正しかれ辻占の神と、心中に頼みを掛けた辻占のといふのである。

○辻占 辻七居て往來の人の何心なにならうなき言葉を開き、それによつて事の吉凶を判断すること。

○詞のはづれ 詞のはし。この文意は、惣七

地誌

まさしかれと心中に頼みを掛けし辻占の、駕籠昇が詞のはづれ惣七が胸に應へ、

掛からぬ繩に氣を縛られ向ふの人は下るれども、我心から身を疎め、下りもやらず「コレ小女郎、先其方から乗換へて先へ行きや」、「そんならお先へ参ります」、

「四日市とやらで待て居よ」、「駕籠の衆早う連れましてや」と下り居の駕籠の河

合村、小女郎は何の氣も附かず駕籠に任せて乗換へ行、石薬師から來る駕籠の者

聲掛けて、女中の連れ衆乗せた駕籠は是か、うちも聞た駕籠換よい、「おつと幸

サア立てい、旦那殿換へまする、下りて下され」と駕籠の簾を打上る、相手は駕

籠を早下りて提げたる風呂敷包、身輕い出立の袷股引・牙籤脚絆に身をかため、

が駕籠昇の詞によつて事の吉凶を占つた。然るに其の駕籠昇の詞のはしにいうた「ころり」が、棟倒で不吉と判断され、捕縛されるものと占つたのである。

○河合村 伊勢國阿山郡河合村。「駕籠の河合村は、同じ頭音によつた即ち頭韻法。

○何の氣も附かず 惣七は捕吏に附組はれてゐる事に氣附いたのであるが、小女郎は何の氣も附かず。

○駕籠の者 駕籠昇をいふ。駕籠に乗つてゐる者ではない。

○女中 婦人。女子。

○うちも聞いた 「打は或動詞に冠して其の意を強める接頭語。「うちも」の「も」は感動の意を示す助詞。この文は、女

の連れ衆乗せた駕籠だと聞いて來たとの意。駕籠昇であるから語氣強く、「うちも聞いた」というたので、「食」しふを「ぶち食」くしふといふの類である。

○立てい 立留れい。昇いてゐる駕籠をおろせよの意。近松作「爰途の飛脚」に之を、「駕籠立、せて暇をやる」。

○相手 惣七と乗換をする駕籠の客であつて、これは捕吏である。

○袷股引 裏を着けた股引。

○牙籤脚絆 合はせ目の端に爪状のものを附け、之をこぼせかけに掛けて合はせとぎる様にした脚絆。

○早繩 さらなば(取繩)。人を捕へて縛る繩。  
○大儀 御苦勞にごさる。

○増 増量。

○縊芋の細引綱 逃げられぬやうに、駕籠に麻繩の細をかけるのである。

○籠の鳥 幽閉された身に喩ふ。近松作「丹波異作待夜のこむろぶし」中之巻に「悲しい事になり果てて、籠の鳥になりました」。

○小屋の者 非人(いふ)。乞食又は夜廻り、路傍の興行などをなして生活し、公役としては捕手の配下に屬して罪人逮捕に助力し、牢番・罪人引越しの護衛などを勤め、死刑執行の時には、其の雜役・跡片付等の事に従つた。

○十手 昔捕手の用ひた刑具。中程に鉤の附いた鐵製の短棒であつて、犯罪者を捕縛する時これをもつて撃つ。「近世事物考」に「慶安年間清朝より陳元震といふ唐人來りて、戒浪人三人に人を捕へる法にて十手の法を教へたり、其の法は今定かに傳はらずして、只此の具にのみじつていふ名残れり。」

○分明の仰せ 罪狀明白であるによつて召捕れよとの命令。

○とても 助詞の「て」に「も」の添つた語。やうしても。所略。

○繩を掛からいで この下に「せめてものお慈悲ぢや」といふを略した。

○切羽 刀の露つばしの両面の、柄つかしに増しやうに當る部分に添へた金物をいひ、楕圓形で薄く、刀身を貫く孔がある。

腰に早繩見るからぞつと惣七が、餘所見る顔は我顔を見せじと忍ぶ頬被、心早に

下り立て、「駕籠の衆大儀」と乗換ゆる、駕籠の簾我手に取て引下し、「急ぎの者じ

や増遣らふ、サア駕籠遣つた」といふ聲は人の耳にも顛ひけり、「小町屋惣七捕つ

た」と聲を打掛ける、駕籠に縊芋の細引綱、中には是はと腕けども翼なければ飛ば

れもせぬ、籠の鳥かや惣七は中に音を泣ばかりなり、かねて相圖の小屋の者、十

手引提くる〜と追取捲き、「科は心に覺えがあらふ、其方共に仲間八人と、分明

の仰を請我々捕に向ふたり、尋常に召捕らるゝか、踏附て繩掛けふか」と云へど

も念佛の聲の外、何の答もあらざれば、「爰は途中次の宿迄此儘連れ行、繩掛けて

國へ引け、それ駕籠やれ」「心得ました、迎も遁れぬ命じやに爰で繩を掛からい

で」と、呟き〜立寄て駕籠昇上ぐればがば〜と、駕籠から漏れて流るゝ血は、

大地に毛氈引ごとく乗手はうん〜喚くにぞ、やれ駕籠の内では自害した、出合出

合」と駕籠投げ捨恐れて側へ寄附かず、役の者共立かゝり綱引退け、簾上ぐれば

色は如何に、一尺五寸切羽際迄突込で、刃先は弓手の脇腹に虫の息目はぎろ〜

呆れて、せん方なかりけり、かゝる所へ小女郎が身にも懸つた縛り繩、引かれて



○弓手 弓を持つ方の手、即ち左手。(爲め手の對)

○こなん こなまん。お前様。

○長らへ物を思へとか 私のみが生き長らへて物思ひをせよとの事か。

○術ない 胸苦しい。(俗語考)「福守部撰」に、「都あたりの詞に、むねの苦しき事をじつないといふは無術にて、せんすべのなき方より轉れる也」。

○天の網 天の網は廣大で、その目疎なるがやうなれども、一人も漏す事なく、善をなした者には必らず善報があり、惡をなした者には必らず惡報がある。「老子」に、「天網恢恢疎而不失」。

○一門の頬に血を濺ぎ 死罪に處せられて鮮血にまみれるのは、一族の面よし(不名譽)となるのであるから、かくいうた。「頬」は面の意。

○薦被る身 非業の死を遂げて薦を被る身。死刑囚。近松作「長町女腹切中之巻」に、「無賴漢ならずもの」の大將(も)かぶりの下地」。

○不便 たよりのない善より轉じて、いそはしいことにいふ。懸然。

○かい 正しくは「かひ」である。生甲斐があるなぞいふ甲斐と同じ語で、價即ち價値の義である。この文は、長く夫婦となつてゐないといふわけで、生命に關する價値の事までもなしたわいの意。即ち死なねばならぬうちを事をしたわいといふのである。

○人は互 人は互に相助け合ふべきである。

○聞けば 小女郎は惣七の詞を聞けば。

來る身の悲しさより此有様を見る悲しさ、流れし血汐踏みしだき、駕籠の内へ顔差し入、小女郎が來ました私も今縛られた、繩掛かりましたぞや、昨夜迄も一つ枕に起き臥て、一處へ契交はしたに、こなん一人が先立て長らへ物を思へとか、苦しう御座ろ術ないか」と、いふも涙に搔昏れて前後も、覺へず泣居たり、惣七苦しき目を見開き、「ヲ、繩掛かつたか小女郎、國法を破り親に不孝の大惡人、廣い世界に狭められ、所の住居もならぬ様に身を持たし、落付方なく常所なく、此所まで迷ひ來て天の網地の繩に搦められし此惣七、古郷へ引れ死罪に遭は、一門の頬に血を濺ぎ、親へは不孝の上塗りと思ひ定ての自害、毛剃九右衛門が海賊に組し、今迄身に纏ひし縞子縮緬、其方に著せた綾錦の冥加に盡き、薦被る身に成果た、夫に連る、習ひとて其方迄繩を掛け、名を流させ憂き目を見するは我一心より事起る、此惣七が無かりせば今の憂い目は見せまい物、不便や嘸悲しかろ、長くも添はぬ物故に命のかい迄なしたよな赦してたもれ小女郎」と、いふ聲も早息切し頼少く見へにける、鋭く見ゆる捕手ども、「獄屋へ渡しては叶はぬ事人は互、兩方名殘惜ませよ」と料簡するこそ優しけれ、聞ば聞程猶悲しく、其起りは誰さす

○おろか おろそか(疎)の義であつて、「愚」は當字。疎にして盡されず。

○檢非違使 司法警察の事を掌り、非違非違の者を檢校糾察する役で、嵯峨天皇の御既に置かれてあつたが、別に役所が無かつたので、淳和天皇の天長年中に使廳を置かれた。後に諸國にも檢非違使の職を置かれた。この文は殊更に平安朝時代の職名を借りて、役所の官人(北條安房守の大阪屋敷の侍)の意にうたのである。

○召人 召捕られた人。囚人。

○がかり 碇泊。「沖がかり」は沖に碇泊してゐる(い)。

○當今 今上天皇。

○流れの身 遊女をいふ。往時遊女は多く水邊の地に住し、舟に乗つて春に接したから、この稱ができたのであらう。

○雑色 雜役驅使を勤める者。有位の者は相當の服色あれど、無位の者は定まつた色がなく、故に位なくして雜役に従ふ者を雑色(さいしき)といふ。(一説に、色は服色の義でなくて、人品の義であるといふ)。

ぞ、小女郎を人手に渡すまいとのお心から、親御に換へ命に換へ女房に持て下されし、それ程私が可愛ひか、冥加ないとも忝ないともお前に禮をいふ詞、日本は愚の事唐天竺にもよも有まい、此手が自由に成ならば、拜んで死に度ふ御座んす」と、夫の膝に顔差寄せ消入、絶入咽せ返れば、「此世で逢ふは今はかり、來世も變らぬ女夫ぞや、南無阿彌陀佛彌陀佛」の、聲も微かに脇差ぐつと抜くより早く息絶へたり、小女郎わつと聲を上、「待て下され連れ立たい、遅いか疾いか殺さる、我命、皆様お慈悲に今爰で殺して下され殺して」と、狂ひわな、き駈け廻る、斯かる所へ檢非違使の何某眞先立、爰彼處にて召捕たる海賊ばら、傾城交り繩附ども一度に彼處へ引來る、檢非違使一札押開き、召人どもに申聞する趣、有難くも承れ、一沖がかり大船に通路を求め、波を潜り水底を抜け船へ近附、諸色を奪ひ取りし事、國法を背く大罪武士に仰て死罪有べき所、當今御即位の御悦びによつて死罪一等を勅免成」と、聞も果す繩附ども、蘇生たる心地して一度にあつとぞ勇みける、重て傾城共に打向ひ、汝等は流れの身、彼奴等に添ふは勤の習ひ科にあらず、行先とても構なし、繩を救せ」と有ければ畏て雑色ども、立寄解

○意氣方 心はへ。氣まへ。やほの反對。近松作「女殺油地獄」上巻に「武家の意氣方泥まぬ御馬、足を早めて急がせ」。この文は、王朝時代にあつた檢非違使の語に應じて「王様」といふ。そして「わうさま」とは蓋はないで「わうさん」といひ、又當時の常用語「意氣方」を用ひた事は、遊女の口吻をうつして滑稽味のもられてゐることが味はれる。

○此世彼の世へ飛び去りて 私を此世に残し、去をつと意七は彼の世(冥土)に魂飛び去りて。

○比翼の鳥 翼をならべて飛ぶ鳥の義。以て夫婦の契の親密なるに喩ふ。白居易の「長恨歌」に「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」。

○たべ 給へ。

○罪の輕重明白たり 重罪でない事は明白であるとの意。輕重の重は意味が軽い。

○不祥 不仕合ふしあはせ。不運。因果。「祥」は「さいはひ」の義。

○止め灸 据え終りの灸。灸は、顔に燒鐵の灸である。これを惡事を止めるにいひかく。

○血みどろちんがい 「血みどろ」は血染即ち髒血の義。生血(なまち)をいふ。「ちんがい」は血が清(あえ)で、即ち流血をいふ。

く繩の跡吹摩り撫摩り、王様の意氣方は又各別な物じやないか、此手が自由に成たれば廓の門を出た様な」と、笑ひ悦ぶ其中に、小女郎は始終しく涙とぐめかねたる顔振り上、連れ合の惣七殿斯かる御慈悲を待受ず、私を捨此世彼の世へ飛び去りて、比翼の鳥の片翼今が博多の此小女郎、生て甲斐なき命ぞや、お慈悲に殺してたべのふ」と聲も、惜まず泣居たる、ヲ、尤々、夫惣七同類とは云ひながら、色に迷ひし若氣の至り、罪の輕重明白たり、自害せしは其身の不祥汝夫に成代り、親惣左衛門に孝行盡し後世を弔ひ得さすべし、勅に任せ彼奴原それ追拂へ、重て惡事を止め灸の、顔に燒鐵・入瘡、耳殺ぐ鼻刺ぐ血みどろちんがい追拂ふ、隣國他國幾萬人博多、小女郎が物語語るも聞も後代の長き、噂を殘しけり

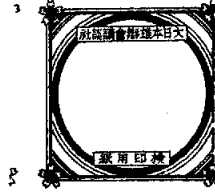


有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷  
昭和十年五月十八日發行

釋義と真叢書  
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代  
東京市豊島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治  
東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

印刷者 井上源之丞  
東京市本所區飯橋一丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場  
東京市本所區飯橋一丁目二十七番地ノ二

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)  
電話(34) 代表 五六二〇〇番  
牛込(34) 代表 六二〇〇番

(本製地海天)